一橋大学一般教育科目等担当教官会議メンバーによる研究・教育活動報告の締めくくりにあたり，掲載の場を与えてくれた一橋大学研究年報編集委員会および『人文科学研究』にお礼を申し上げたい．今年度は『自然科学研究』が発行されないので，自然科学関係教官の報告も一括して当年報に載せる運びとなった．なお海外出張中および病休中のメンバーはともに今回の報告には参加していないことをお断りしておく．

1992年12月20日　　山田　直道

いるが，主要なものは以下の通りである．

Kinetics of α-and β-hydrogen Abstraction from C_2H_5Cl by Bromine Atoms. Estimate of C-H bond Dissociation Energies and Heats of Formation of CH_3CHCl and CH_2CH_2Cl Radicals, with E. Tschuikouw-Roux,

J. Phys. Chem., **1990**, 94, 715.

Thermal Properties of Nickel (II) and Copper (II) Complexes with *N*-Methyl-substituted Salicylideneaminates,

with H. Wakita,

Thermochim. Acta, **1991**, 182, 121.

Kinetics of Solid State Dissociation Reaction of Tranasition metal Complexes,

with H. Wakita,

Trends in Inorganic Chemistry, **1991**, 2, 69.

Reaction of Atomic Bromine with Difluorochloromethane. The Heat of Formation of $CClF_2$ Radical and the D° ($CClF_2$-H) Bond Dissociation Energy,

with E. Tschuikouw-Roux,

J. Phys. Chem., **1992**, 96, 1121.

所属学会：日本化学会・日本熱測定学会・アイソトープ協会・化学ソフトウェア学会

・関数（z＝f(x,y)）の3次元データ自動グラフ化プログラム（その2）第6回（長岡）

国際会議での発表

Microcomputer Software Development for the Use of Structural Chemistry. Internatinal Chemical Congress of Pacific Basin Societies. 1989,

Honolulu, Hawaii.

Data Base of Qualitative Analysis and its Application to CAI. 4 th Asian Chemical Congress. 1991, Beijing, China.

所属学会：日本化学会および化学教育部会，化学ソフトウェア学会

御代川　貴久夫

(1)　小平では「環境科学」および「ゼミナール」，国立では社会学部の「科学技術論」および「ゼミナール」を担当している．環境科学では現在の地球環境問題を主に自然科学的な側面から理解できることに主眼をおいた講義をしている．ゼミナールではわれわれの現在直面している環境問題で受講生が興味をもっている領域についての内外の文献調査の成果を発表させ，それについて参加者で討論をするという形式の授業を行っている．国立での担当科目については社会学部の報告書を参照のこと．

(2)　図書委員（本館・分館），カリキュラム改革委員

(3)　現在の研究課題は（i）環境関連物質の気相における反応性に関するものと（ii）環境教育のためのコンピュータソフトウェアの開発の2つである．両者とも着実に進展している．

(4)　過去3年間で国際学会での報告も含めて9編の研究論文を発表して

ある．また一方では人工知能的要素を取り込むべく，プロログ言語による化学知識の取扱に取り組み始めた．この方面はまだ未開拓分野なので非常に面白いと思っている．

(4)　発表論文：

・化学反応速度論 II. 素反応速度に関する理論（1991・ぶんせき・2（38-47））

・マイクロコンピューターを利用した分子モデリングと，双極子モーメントおよび分子回転（マイクロ波吸収スペクトル）計算への応用（1990・一橋論叢・104（348-370））

・マイコンによる物質波のシミュレーション（1989・化学と教育・37（76-79））

・分子の世界を見る－コンピューターグラフィックスによる分子とその運動（1986・一橋論叢・96（60-79））

・Competitive Photochlorination of the Fluoroethanes CH_3CHF_2, CH_2FCH_2F and CHF_2CHF_2（1986・J. Photochem.・32（25-37））

・Infrared Laser Multiphoton Dissociation of CH_2ClCH_2Cl（1985・J. Phys. Chem.・89（1108-1116））

口頭発表：

化学 PC ソフトウェア研究討論会での発表（1987-1991）

・分子の「構造と運動」のマイコンを利用したアニメーション　第2回（埼玉）

・マイコンによる分子構造の構成　第3回（姫路）

・いろいろな関数（y＝f(x)）の自動グラフ化プログラム　第4回（福井）

・関数（z＝f(x,y)）における3次元データ自動グラフ化プログラム

・化学啓蒙ソフトの開発　第5回（東京）

矢野　敬幸

(1)　小平では「化学」及び「ゼミナール」を，国立では「科学技術論」(社) と「ゼミナール」(社) 及び大学院 (社会学：シュミレーション技法) を担当している．「化学」では，物質を構造とエネルギーという両側面から理解させるよう努めている．化学は暗記物ではなく筋の通った学問分野であること，しかし発展過程に於いてはきわめて人間的でもあることを強調している．物質を取り扱う学問故にできるだけ教卓実験を実施している．小平ゼミでは化学実験及びコンピュータ演習の2本立で行っている．教師の負担は大きいが少人数教育のメリットを生かしていると思う．「科学技術論」は理科のスタッフのほぼ全員で分担している．個人的には隔年開講で，私の場合は，現代科学技術の展望と諸問題，すなわち科学技術についてまわる光と影について講義している．国立ゼミでは自分自身の研究動向に合わせてプログラミングや周辺知識の勉強を行っている．最近は人工知能言語として知られるプロログの演習書をもとにした輪読会及び化学知識をいかにプロログで記述するかという課題に挑戦している．大学院ではパソコンの基礎からはじめてシミュレーション技法及びディスプレイの技術を演習している．

(2)　化学ソフトウェア学会の理事及び学会誌編集委員．

(3)　従来から続けていたハロゲン置換炭化水素の反応の研究を御代川教授及び尾崎助手との共同研究として行っている．最近は光臭素化を利用した熱化学的基礎データの集積をめざしている．他方で，着任以来始めたコンピュータの化学への利用の一環として化学教育プログラムを開発している．独自に開発した分子モデリングシステムとそれを基にした双極子モーメントやマイクロ波吸収計算プログラムは大きな成果だと思っている．最近ではさらに発展させて，分子の対称性を取り扱えるシステムを構築中で

ゼミでは環境放射線の測定と，そのデータのパソコンによる処理を通じて，自然科学の方法を学ばせている．

大学院：「エネルギー商品特殊問題第二」を開講．テーマ：粒子加速器とその応用．

(2)　前期学務委員．

(3)　都市における環境放射線の研究：現在，東本館内外の環境ガンマ線を測定しつつ，測定装置，データ解析のプログラムを整備している．加速器・粒子線計測：次のテーマを検討中．

(4)　発表論文：

'Design, Construction and Operation of the RFQ Linac 'LITL' ',
T. Nakanisi et al.,（共著），
Particle Accelerators, Vol. 20, pp. 183-209, 1987.

'Design of the INS ECR Ion Source', M. Sekiguchi et al.,（共著），
Proc. Int. Conf. ECR Ion Source and their Application.
NSCL Report MSUCP-47, pp. 323-333, 1987.

'Electron Cooling at TARN II., T. Tanabe et al.,（共著），
Proc. 19th INS Symp. Cooler Ring and their Applications, pp. 69-74, 1990.

'Study on RFQ Linacs for Heavy Ions', UEDA Nozomu,（学位論文），
INS-T-500（*Accelerator*-12), pp. 1-99, 1990.（東京大学原子核研究所報告）．

所属学会：日本物理学会，加速器同好会．

(4) 最近2年間の発表論文：

・「地学研究室における地震計の設置について」,『一橋論叢』, 第106巻第3号, 1991年9月, 273頁.

・"Construction of a Standard-from Data Set and its Reduction System on the Workstations", Proceedings of the Astronomy from *Large Databases*, 1992, (in press).

・「文科系学部における情報科学教育のあり方に関する研究」, 森社会工学学術奨励金報告論文, 1992年.

著書：『まわる地球』, ポプラ社, 1986年.

所属学会：日本天文学会, 日本測地学会.

上田　望

(1) 前期：「物理学」を開講. 物理学は他の自然科学, また文学や音楽などと同じように人間の知性の最高の産物である. 人間は自然を考察する中で, 天界と地上の運動の法則, 熱と力学的エネルギー, 電気と磁気, 光と電磁波, 質量とエネルギー, 空間と時間, 粒子性と波動性, 電磁気力と素粒子間に働く「弱い力」等, 一見別個のものと思われるものを統一的に理解してきた. 自然の理解の深まる過程を明らかにするという観点から物理学を概説. ゼミではパソコンを用いて惑星の運動方程式を解きケプラーの法則を導く. また, 水素ガスの放電光の波長を回折格子分光器により測定してバルマーの法則を導き, ここから量子力学に入る. これらを通じて, 自然科学の方法と成果の例を学ばせている.

後期：理科エリアの他の教官と協力して社会学部で「科学技術論」を開講. 筆者は科学・技術・社会の関係を核物理学・加速器を題材に考察して話す.

「コンピュータ技術の進歩と社会の変化」を主テーマとする学習研究活動を行う．3年生はまずパソコンの使用法について実習することを中心とし，また前記テーマについての基礎的な学習を行う．4年生は「ビジネスにおけるエキスパートシステムの利用」，「SISと経営」，「金融業におけるコンピュータの利用」などのテーマで卒業論文のための調査研究活動を行う．また夏期・冬期のゼミナール合宿において，コンピュータ産業あるいは進んだコンピュータ利用を行っている産業の見学調査を行う．

・「大学院講義，社会学」（国立，社会学研究科，通年）

大学院生にあってもパソコンを初歩から学習する希望がかなりあるので，本講義はその需要を満たしつつ，コンピュータという社会現象の持つ意味を考察する．

・「大学院ゼミナール」（国立，社会学研究科，通年）

Astronomical Chronologyについて研究．（本年度は受講者なし）

(2)　学内では，視聴覚教育委員会（委員長），南欧国際交流委員会（委員），森社会工学学術奨励金運営委員会（委員），を務める．学外はなし．

(3)　現在の研究課題としては，天文学の内特に恒星位置に関する研究を行っている．これは，天球上の恒星の位置を精密に測定することによって，その運動，さらにその総体としての銀河系の回転運動，などを明らかにしようとするものである．方法としては，天球上では不動であると考えられる遠方の電波源と恒星の相対位置を精密に決定し，それぞれの基準座標系の相互の関係を決定することが当面の課題である．

このほか，最近では文科系学部における情報科学教育のあり方についても，調査研究を開始している．現在，これまでの4年間の試行錯誤についてのとりあえずの報告書をまとめた段階である．このところ，各方面からの関連研究報告がようやく出版され始めているので，今後はこれらとの関連を探りつつ，基本的な方法論を確立してゆきたい．

Takagi S, Kamitsubo E, Nagai R (1992) Visualization of a rapid, red/far-red light-dependent reaction by centrifuge microscopy. Protoplasma 168 : 153-158

所属学会

日本植物学会・日本植物生理学会・日本細胞生物学会

中嶋　浩一

(1)　担当科目・授業等：

・「情報科学」(小平，一般教養自然科学，通年講義)

コンピュータ技術を軸とした情報科学について，総括的な知識を解説する．特に対象が文科系学生であることを考慮して，ふだん接する機会の少ない「技術論」的な知識の伝達に努めるとともに，コンピュータ技術の進歩と社会の変貌などにも言及する．

・「前期ゼミナール」(小平，自然科学ゼミ，通年)

天文学の実際的学習を主テーマとする．特に，コンピュータを用いたシミュレーション実習や望遠鏡による観測実習などを重点的に行うが，宇宙論や相対性理論の学習をも取り入れ，天文学に対する現代的な需要を満たすように心がける．

・「科学技術論」(国立，社会学部講義，理科教官２名で通年)

「科学的」ということがどのような意味を持つか．この問題は，自然科学と社会科学を対比させて考える時に特に重要となる．この観点からこの講義では，自然科学の進歩とその姿を実例で検討しつつ，社会科学における「科学的」ということの意味を考える．

・「後期ゼミナール，３年・４年」(国立，社会学部，各通年)

日本植物学会第55～57回大会

遠心加速度場における真正粘菌変形体の原形質流動II（静岡，1990）

遠心加速度場における真正粘菌変形体の流動速度分布（東京，1991）

低温条件におけるNitella原形質流動の遠心顕微鏡観察（奈良，1992）

註　全て菊山宗弘（放送大・生物）と連名

筋収縮・細胞運動研究会（帝京大・医）1989年～1991年に発表.

講演要旨はAbstracts of the 1989 (1991) Annual Meeting on Muscle and Cell Motility Physiology, in: J. Muscle Research and Cell Motility, Chapman and Holl Ltd.

国際会議

5th Internat. Congress on Cell Biology, Madrid (1992)

Measurement of Motive Force for Cytoplasmic Streaming in Internodal Cells of Characeae. （菊山宗弘と連名）

発表論文

Kaneda I, Kamitsubo E, Hiramoto Y (1990) The mechanical structure of the cytoplasm of the echinoderm egg determined by "gold particle method" using centrifuge microscope. Dev Growth Differ 32 : 15-22

Oiwa K, Chaen S, kamitsubo E, Shimmen T, Sugi H (1990) Steady-state force-velocity relation in the ATP-dependent sliding movement of myosin-coated beads on actin cables in vitro studied with a centrifuge microscope. Proc Natl Acad Sci USA 87 : 7893-7897

Kamitsubo E, Kikuyama M (1992) Immobilization of endoplasm flowing contiguous to the actin cables upon electrical stimulus in Nitella internodes Protoplasma 168 : 82-86

理　科

上坪　英治

(1)　前期　生物学，生物学ゼミナール

講義内容は1992年度講義細目（自然科学編）を参照のこと．ゼミの内容については講義要綱に略述してある．講義は，精選された図・表・グラフより成る教材プリント（年間約35種類）を軸とし，demonstration* および映像資料**を駆使しておこなわれる．

*　主として教卓実験，他に実物・模型等の展示．

**　35mm slide 約200枚／年．16mm 映画約10本／年．

(2)　日本細胞生物学会評議員（平成2年1月1日～平成5年12月31日）

(3)　約35年間，一貫して細胞運動の生理学的研究に従事．　材料；主として車軸藻類節間細胞（周回型原形質流動）および真正粘菌変形体（往復型原形質流動），他にアメーバなど．研究目的；原形質流動機構の解明．方法；"窓明け法""非接触電気刺激法""新型高性能遠心顕微鏡"などを開発し，細胞質粘度の in vivo 測定，流動原動力測定などを行っている．成果については(5)を見よ．

(4)　過去3年間の業績

学会発表

日本植物生理学会1990年度～1992年度会およびシンポジウム

遠心加速度場における車軸藻類節間細胞の原形質流動（東京，1990）

車軸藻類節間細胞原形質流動の原動力測定（岡山，1991）

車軸藻類節間細胞の原形質流動におよぼす横向きの遠心力（熊本，1992）

の院生が受講.

(2)　学内ではカリキュラム改革委員会委員など，学外では現代スポーツ研究会幹事.

(3)　国際労働者スポーツ運動の歴史を現代的視点で再検討すること．20年来の研究対象たるオーストロ・マルクス主義の哲学者マックス・アドラーの研究とともに，社会主義思想・運動史研究とスポーツ社会学の統合によるスポーツ運動史学を志向．現在，既発表論文と未発表原稿の手直しによる単行本を準備中．また若手研究者との共同研究「1930年代のスポーツ運動」の出版も鋭意検討しているが，その実現は五里霧中.

(4)　「国際労働者スポーツ運動の形成」(『スポーツの自由と現代』下，1986年，青木書店所収）や編訳『論集・国際労働者スポーツ』(1988年，民衆社）などスポーツ運動史を中心に，『近代スポーツの社会史』(唐木共訳，1980年，ベースボール・マガジン社）をはじめとするスポーツ史論，「1849年バーデン革命の起点」(良知力編『共同研究・1848年革命』1979年，大月書店）など歴史・社会思想論文を執筆．この2年では「理念としての社会主義の重層構造」(『思想と現代』27号，1991年)，「現代の国際労働者スポーツ運動」(一橋大学体育共同研究室編『研究年報1992』）が主なもの.

所属学会は，日本体育学会，日本スポーツ社会学会，現代スポーツ研究会，唯物論研究協会，東欧史研究会，国際労働運動史家リンツ会議日本委員会.

精神優位・身体劣位の観念の歴史の中で，身体の研究もまた冷遇されてきた．それを克服すべく，一石を投じたい．

(4) 執筆（著書のみ）は以下のとおり．

『スポーツ運動の課題』（星林社，編著 1983）

『体育科の学力と目標』（青木書店，1984）

『体育のめあてを生かす授業と評価』（日本標準，編著 1984）

『子どもの身体と健康観の育成―健康教育論―』（医療図書出版社，1985）

『がんばれスポーツ少年』（新日本出版社，1987）

『スポーツの公共性と主体形成』（不昧堂出版，1989）

『子どもと教師を励ます評価』（日本標準，1992）

『戦後スポーツ体制の確立』（不昧堂出版，1993）

上野 卓郎

(1) 小平で体育実技・講義，特殊講義またはゼミ，国立で後期体育，大学院講義（法研・各国政治思潮）を担当．

実技では複数の種目の技術特性の理解とゲームの取得に主体的に関わらせる授業を展開．講義ではスポーツ論・スポーツ批評の報告・討論による小論文の創作を指導．文化としてのスポーツの構造的把握への認識の発展を促す不可分の契機として実技・講義があるが，現在の2年次の講義だけでは不十分．単なる実技科目ではない体育の内容を適切に示す科目名・形態の変更が必要だと思う．このことは国立での後期体育でとりわけ痛切．前期ゼミ・特殊講義ではヘーゲル左派と初期マルクス，社会主義思想研究を12年間継続．大学院ではオーストロ・マルクス主義思想研究に法・社

(3)　近代体育・スポーツ史研究．現在，日本とドイツの戦後スポーツ改革に関する比較研究に従事している．

(4)「ドイツ連邦共和国におけるスポーツの市場化とスポーツ運動・システム」(『研究年報 1992』一橋大学体育共同研究室編，1992 年)，「ドイツにおけるスポーツ観の変遷」(『体育科教育』，1992 年 1 月号)，編著書『明日に向かう体育』(大修館書店，1992 年)．

内海　和雄

(1)　小平での体育実技（テニス，軟野，洋弓，ソフト，バレー，水泳，バド)，講義（『スポーツの公共性』)，ゼミ（『人間性と人格の理論』)．国立での実技（バド)，講義（現代とスポーツ)．法学研究科（スポーツと法の諸問題)．

(2)　学内では体育科主任，構内交通問題対策委員他，幾つかの委員会を兼務．学外ではスポーツや教育研究団体の役員．そして家に帰ると自治体の社会教育委員，そして子どもの学校の PTA 役員．PTA を自ら（教育学者）の「教育実習」として位置付け，教育と PTA の民主化に微力を傾注．学会活動としては，日本体育学会，日本社会教育学会，教育目標・評価学会（常任理事)，国際レジャー研究学会等に参加．

(3)　研究は大きく三本柱で進行中．第一は教育論であり，体育科教育論や教育評価論などの教育学研究．第二はスポーツ論であり，国民の社会運動としてのスポーツ運動を中心に，政策・行政を研究．特にアマチュアの崩壊をきっかけとしてスポーツの権利論と公共性論を追究．第三は身体・健康論である．これまでの健康教育論の文化背景ともいうべき人類史の中での身体・健康の位置，所有，思想，技術等を社会との関連で把握する．

"Differences between the U. S. and Japan in School Health Services" (Note) *Hitotsubashi Journal of Social Studies* 1992.8

"Comparison between the United States and Japan in School Nursing" *Hitotsubashi Journal of Social Studies* 1993.3

〈所属学会〉

日本体育学会，日本学校保健学会.

American School Health Association

高津　勝

(1)　小平では，保健体育実技と講義，両者を合わせた「合同」体育，および前期ゼミナールを担当している.

実技では技能の習熟と戦術・ゲーム構成力，批評力，組織運営能力の獲得をめざしている.

「合同」の授業ではサッカーを指導し，学習集団の自己組織化の図りつつ，サッカーに関する技術学的認識と社会科学的な認識を統一的に形成することをめざしている.

学習の成果の一端を示すものとして，昨年度の3名の受講生による期末レポートが1992年発行の雑誌『一橋』に掲載されている.

体育講義は，現代のスポーツに関する諸問題をとりあげ，受講者の主体的な参加を促すことをねらい，講義・グループ討論・個人レポートを融合した形式を採用している.

国立では保健体育第2（実技），第3（講義）と大学院（「各国政治思潮」第3）を担当．テーマは，比較戦後スポーツ改革.

(2)　学内では，1992年3月末まで体育エリア主任.

いる.

(2)　2年間の海外研究を終えて帰国間もないため，今のところ学内任務から放免されている．学外ではいくつかの民間教育研究団体で常任委員，世話人，編集委員など.

(3)　当面は，2年間の米国滞在で調べてきた米国のSchool HealthとSchool Nursingの制度や実態についてのまとめと，日本との比較検討の作業を中心にしつつ，日本の学校のもつ子どもの健康保護機能と教育機能との関連を歴史的・理論的・実践的に解明するという課題（ライフワーク）につなげていきたいと考えている.

(4)〈著書：1980年代以降のもの〉

『双書　子どものからだI　からだをみつめる』共編著　大修館書店　1981

『子どもの生活をどう立てなおすか』編著　あゆみ出版　1983

『現代保健学習・指導事典』共編著　大修館書店　1984

『養護教諭実践論』単著　青木書店　1985

『養護教諭実践の創造1～3』共編著　青木書店　1988

『子どものからだと心の発達』編著　労働旬報社　1989

〈論文：近年のもの〉

「新学習指導要領批判：身辺処理的・行動主義的保健教育への傾斜」『体育科教育』1989.5

「養護教諭が養護教諭になるとき」『体育科教育』1989.12

「アメリカ・スクールナース」『健』1992.4～1993.3（連載中）

「アメリカ合衆国保健教育事情　1　エイズ教育は保健教育の最重要課題」『体育科教育』1992.6

「子どもをしなやかに育てる」『教育』1992.7

「保健科の内容体系私案」『体育科教育』1992.8

いスポーツ活動の動向分析を行っている．成果はまとまり次第出版する予定である．

(4) 「フランス・スポーツ社会学の研究動向」(『研究年報 1991』一橋体育共同研究室)，「『ニュースポーツ』の胎動」(『研究年報 1992』一橋体育共同研究室)，「スポーツにおける人間と自然」(『一橋大学一般教育総合科目Ⅰ人間と自然』) など．その他フランスのスポーツに関する論文を体育・スポーツ誌に発表してきた．

スポーツ産業学会所属．

藤田　和也

(1) 小平では体育実技と保健体育講義，国立では 3，4 年生対象の保健環境論，大学院で体育社会学：保健社会論を担当している．

体育実技では，スポーツの技術認識と技能習得，スポーツ学習の方法やスポーツ活動の組織・運営能力の習得をめざして授業内容を工夫している(つもりである)．保健体育講義では保健理論を講じている．健康の形成・維持，破綻，回復・予防の過程における今日的な問題のいくつかをとりあげ，それらの問題の自然科学的・社会科学的の両側面から検討を加えていく．

保健環境論では，健康と環境のかかわりの問題をさまざまな角度から検討することを主題としている．問題の対象は今日のグローバルなレベルでの環境問題はむろんであるが，都市問題，労働問題，保健・医療問題等々も健康にかかわる重要な問題として扱っている．

大学院では，公衆の健康の形成・維持にかかわる社会的諸施策（保健・医療政策，環境政策，教育政策，体育スポーツ政策）の在り方を検討して

早川　武彦

(1)　小平では保健体育，ゼミナール，国立では保健体育第一，大学院（労務管理特殊問題：企業内レクリェレーション）を担当.
小平での保健体育は実技と講義及び実技と講義を合わせた（合）を担当している.
＊実技ではテニスの技術とその獲得の方法の学習を，＊（合）ではテニスに関する歴史，技術，指導法，あり方など総合的な技能と技術・知識の学習をねらい，しかもこの学習過程をも学習の対象とする（授業の自己点検評価の）取り組みを行っている．＊講義では「スポーツとはなにか」を，歴史，理念，政策・運動面からジャーナリスティックな問題に引き寄せて，講義・レポート・討論形式で行い，＊ゼミでは「一橋スポーツを考える」をテーマに世界のスポーツから自らのスポーツ問題へと身近な問題を素材に討論を積み上げ，最終レポート作成とその公表にむけた取り組みを進めている．さらにこのゼミはスポーツ組織論をも手がけている．実習として学内の学生を対象とし学生相互の交流を図る意図の下に毎年スキーツアーに取り組み，大きな成果を生み出している．＊国立の授業は技術認識と技能習熟の問題をテニスを教材として取り組んでいる．しかし単位数が2.7と半端なため受講生にとって単位の面で余り魅力がない．この点について早急な改善が望まれる．＊大学院では，余暇，レクリェーション，スポーツ問題について，労働との関係における特殊問題をレポートさせ，企業内レクリェーションの意味とあり方を討論している.
(2)　学内では前期学務委員長．学外では学校体育研究同志会全国常任委員長．全日本学生硬式庭球同好会連盟顧問.
(3)　フランスの新しいスポーツ活動の分析を中心に，近代スポーツの変容過程を検討している．現在フランスのスポーツ社会学研究における新し

おけるスポーツの機能，組織，理念についての学説，研究方法，問題をとりあげ検討している．夏学期は川口智久教授がアメリカを中心とした領域をあつかうので，冬学期はヨーロッパと日本を中心に講義をする．ゼミナールは，スポーツとマスメディア，コマーシャリズム，フェミニズム，環境問題など，現代社会におけるスポーツのあり方をめぐって報告と討論を行い，それを卒業論文にまとめさせることにしている．

・商学研究科労務管理特殊問題では，戦間期20年代，30年代のイギリス労働者のレジャーの発達について下記のテクストを読み，討論している．Jones, Stephen, *Workers at Play, a Social and economic history of leisure 1918-1939*, London 1986.

(2)　学内では附属図書館小平分館長，同エクスオフィシオ諸委員会委員．

(3)　旧東独のスポーツ科学の業績について整理し，とくにボールゲームの理論体系について翻訳出版の予定．また，現代社会におけるスポーツの変容について「運動文化」の大概念のもとに理論化の作業を継続している．

(4)　国際体育スポーツ史学会報告

・The First Japanese Olympic Delegation in 1912 (*Proceedings of the 13th International HISPA Congress 5. 22-28. 1989*, Athens 1991 所収)

・A "Non-Competitive Sport" KENDO, (1. ISHPES Congress, Las Palmas 31. 5/6. 6. 1991, in printing) その他，東欧のスポーツ体制崩壊について1990年9月，1991年5月の現地調査の報告などを雑誌『体育科教育』(大修館書店，1991年7月，8月，12月，1991年2月，10月，1992年1月号) に発表．

「『スポーツ権』のためのたたかい」『生涯スポーツの創造』第2号，1991年8月

「ドイツ戦後スポーツ改革の根本問題――フリッツ・ヴィルドゥングの『戦後スポーツ構想』について（上）――」一橋大学研究年報『人文科学研究29』1991年9月

「同上（中）」一橋大学研究年報『人文科学研究30』1993年3月

・翻訳

「ブレーメン州スポーツ振興法」『生涯スポーツの創造』創刊号，1990年7月

「スポーツクラブの将来」『社会体育に新しい風を1987』1989年7月

②所属学会

日本体育学会，日本社会教育学会，国際スポーツ社会学会

唐木　國彦

(1)　保健体育実技，保健体育講義（小平），社会学部体育社会学講義およびゼミナール，商学研究科労務管理特殊問題.

・保健体育科目では，受講者の既存のスポーツ観をいったん解体させ，社会現象としてのスポーツを科学的に把握する方法を学習することを目標にしている．実技は，公式ルール，練習方法にたいする批判的検討を行い，「スポーツに人間をあてはめる」のではなく「人間にスポーツを合わせる」という視点からの練習と試合の体系を自ら考えさせるようにしている．講義では，上述のようなアクティブなスポーツ参加とスポーツ享受によってはじめてスポーツの発展があることを歴史的，社会的に実証する.

・体育社会学講義は，むしろスポーツ社会学と呼ぶにふさわしく，社会に

月」
「スポーツ理念の転換――『私的』スポーツから『社会的』スポーツへ」『スポーツのひろば』1980年1月
「文化としてのスポーツ」『月刊社会教育』1980年1月
「権利としてのスポーツ理念」『国民教育』第46号，1980年11月
「民衆スポーツの発展の意味するもの」『楽しい体育・スポーツ』1982年12月
「マルクスの真に自由な労働によせて」『唯物論研究』1983年5月
「公共スポーツ施設の『民間委託』に抗して」『月刊社会教育』1986年1月
「スポーツにおける戦後とは何か」『スポーツ評論』第6号，1986年2月
「現代社会におけるスポーツの価値と創造」『スポーツの概念』不昧堂，1986年4月
「『社会体育指導者認定制度』とスポーツの発展」『スポーツのひろば』1987年2月
「スポーツと民主主義」『体育原理講義』大修館，1987年3月
「スポーツ・社会体育政策の動向」『月刊社会教育』1987年11月
「文化としてのスポーツ」『社会体育に新しい風を1987』1988年6月
「問い直される東ドイツのスポーツ」『思想と現代』第23号，1990年9月
「『生涯スポーツ』に関する基準論」『生涯学習計画と社会教育の条件整備』エイデル研究所，1990年2月
「『21世紀に向けたスポーツ振興方策』について」『生涯スポーツの創造』創刊号，1990年4月
「『地域スポーツの実践』の到達点と展望」『月刊社会教育』1991年6月
「日本スポーツの現状」一橋大学体育共同研究室『研究年報1991』1991年8月

ギー論』）などで，各人の「問題」の形成過程から解決の過程までを問題とする．具体的には，ゼミ終了論文を書き上げることがめざされる．今年は，9名のゼミテンが50枚から120枚の質の高い論文を書き上げた．これらは，製本され後輩のために保存されている．

(2)　学外では，現代社会体育研究会代表．雑誌『生涯スポーツの創造』編集長．

(3)　現在の研究課題は，①ドイツ戦後スポーツ改革の研究．その一部は既に一橋大学研究年報『人文科学研究』第29号及び第30号に発表．続編を執筆中．②これまで取り組んできた「戦後日本のスポーツ政策」研究をまとめること．来年出版の予定．

(4)　①研究業績

・論文・著書

「戦後日本のスポーツ政策」一橋研究年報『経済学研究14』1970年3月

「戦後における『新体育』の理念」『一橋論叢』1972年3月

「前川峰雄の『生活体育』論について」『一橋論叢』1972年5月

「体力づくり運動の現状と課題」『体育科教育』1974年7月

「スポーツ政策論序説」一橋大学研究年報『経済学研究19』1975年5月

「『国民スポーツ』の発展のために」『体育科教育』1975年8月

「『近代スポーツ批判』の方法について」『一橋論叢』1975年11月

「『国民スポーツ』とは何か」『一橋論叢』1977年1月

「スポーツ権論の基底にあるもの」『運動文化』1978年1月

「現代日本のスポーツ政策」『スポーツ政策』第4巻，大修館　1978年3月

「スポーツ権とスポーツの価値」『運動文化』1978年4月

「スポーツの価値とその実現主体の形成」『運動文化』1978年7月

「自治体スポーツ行政の現状と課題」『地域と自治体』第9集，1978年11

ンの普及に伴なうスポーツ番組の放映時間と種目の増加に伴う大衆のスポーツに対する認識の変化とスポーツ自体の変質の関連の解明．長期的には19世紀末アメリカン・フットボールの創出に果したウォルター・キャンプの役割と今日のアメリカ民衆のフットボールとのかかわりを明らかにすることである．前者は基本資料の収集を済ませ，目下解析中である．後者についてはフットボール成立の歴史的検討を終り，キャンプの関係者との往復書幹等の資料の収集と分析を進めている．

(4) 過去フットボールの成立にかかわるアメリカ的スポーツ観とイギリス的なそれとの差異を明らかにする論文を書いてきた．

現在日本体育学会と北米スポーツ社会学会（North American for the Sociology of Sport）に所属している．

関　春南

(1) 小平で，保健体育実技，講義，実技・講義（合），ゼミナールを担当．

保健体育実技は，基礎的な技術の習得をつうじ，文化としてのスポーツと身体とにたいする科学的認識の習得をねらいとしている．講義は，現代スポーツ論で，現代日本のスポーツ問題の解明をつうじ，スポーツの社会科学的認識の獲得をねらいとしている．実技．講義（合）は，現代社会で失われてきている「人間の自然性」を走ることを通じて回復していくことがねらわれ，そのために必要な，「自然環境」，「生活」，「身体」の認識の実践的獲得がめざされる．ゼミナールは，テーマは，「社会科学における問題とは何か」，つまり，「問題」を軸にした社会科学方法論である．テキストは，内田義彦の「社会科学の視座」（『作品としての社会科学』），暉峻淑子『豊かさとは何か』，戸坂　潤「問題に関する理論」（『日本イデオロ

sis, M. Kashiwara and T. Kawai eds., Academic Press, San Diego, 1989, Vol. 2, 911-926.

[3] The essential self-adjointness of pseudodifferential operators associated with non-elliptic Weyl symbols with large potentials, Osaka J. Math., 29 (1992), 175-202.

体　育

川口　智久

(1) 小平で体育実技と保健体育講義（現代社会とアメリカのスポーツ），国立で社会学部の体育社会学及びゼミナール，また大学院の体育社会学講義と演習を担当している．

小平での実技は専らスポーツ技術の学習・習得の方法と組織的活動のあり方について指導をしている．また講義はスポーツのあり方が政治・経済とどのようなかかわりを持ち，どのような役割を果しているかを明らかにすることをしている．

体育社会学では事例研究（例えばNCAAの存在とその特徴や，問題，健康体力の衰微とスペクテータースポーツの隆盛など）を中心に講義している．

(2) 現在学内のいくつかの委員会に所属している．学外では国立市社会教育委員の会・議長，国立市体育指導委員会委員を務めている．また日本体育学会東京支部の常任理事でもある．

(3) 現状において二つの課題を持っている．短期的には戦後テレビジョ

(3) 偏微分方程式論における種々の問題に擬微分作用素を主な道具として取り組んでいる．具体的には次のような問題を研究している．

(a) 滑らかでない表象を持つ擬微分作用素の種々の函数空間における有界性

(b) 分散を記述する偏微分方程式の smoothing effect

(c) 大きなポテンシャルを持った非楕円型擬微分作用素の本質的自己共役性

(4) 上記(a)については，擬微分作用素が重みのついた L^p- 空間上で有界となるための，表象の滑らかさについてのぎりぎりのところまで緩い条件を与えた論文 [1] 等の結果がある．

上記(b)については論文 [2] で，分散型偏微分方程式，即ち，波速が波長の函数であり，特に波長が 0 に近づく時に波速が無限に大きくなる波動を記述する偏微分方程式に対して，初期値のある方向での減衰が解の超局所的な滑らかさを導くことを示した．

上の結果をより一般の偏微分方程式に対して拡張するために，主部が楕円型とは限らない定数係数線型偏微分作用素と非有界なポテンシャルの和の形に書ける作用素が L^2- 空間上自己共役になるための条件を求める必要があり，これが上記(c)の問題を考える動機となった．論文 [3] ではこの問題を定数係数擬微分作用素とポテンシャルの和の形の作用素に一般化して，擬微分作用素の係数とポテンシャルの増大度に関する精密な十分条件を得た．

所属学会は，日本数学会及び American Mathematical Society.

[1] The weighted L^p-boundedness of product type pseudodifferential operators, Adv. Math., 74 (1989), 31-56.

[2] On the microlocal smoothing effect of dispersive partial differential equations, I. Second-order linear equations, Algebraic Analy-

専門は，数学（確率論，解析学），日本数学会所属

1980年代前半は「多様体上の確率過程」に関する研究

日本数学会，日ソ確率論シンポジウム，その他などで口頭発表

Journal of Math. Kyoto Univ. などで，発表論文4篇

1980年代後半～1990年代前半は「フラクタル上の拡散過程」に関する研究

日本数学会，マルコフ過程シンポジウム，谷口国際シンポジウム，その他などで口頭発表.

Publications of the Research Institute for Mathematical Sciences などで発表論文3篇

その他　大学等における数学教育についても関心がある.

山崎　昌男

(1)　小平での「数学要論1」,「数学要論2」,「現代数学A」,「現代数学B」，国立での「数理解析A」を担当している.

「数学要論1」及び「数学要論2」では，新入生を主対象として，微分積分学及び線型代数学の入門講義及びその続論をそれぞれ行っている.

「現代数学A」及び「現代数学B」では，位相空間論や函数論のような従来数学専攻の学生向けと思われていた話題を，予備知識の少ない学生向けに内容を精選して講義している.

「数理解析A」では，専門課程でやや高度な数学を応用する学生を主対象として，常微分方程式論，力学系，多変数解析学などの系統立てた講義を行っている.

(2)　学内での図書館小平分館委員.

Japan 42 (1990), 73-90.

2) H^p spaces over open subsets of $\mathbf{R}^n$, Studia Math. 95 (1990), 205-228.

3) Some Littlewood-Paley type inequalities and their application to the Fefferman-Stein decompostition of *BMO*, Indiana Univ. Math. J. 39 (1990), 563-583.

4) Estimates for pseudo-differential operators of class $S_{0,0}$, Math. Nachr. 133 (1987), 135-154.

5) Weak factorization of distributions in H^p spaces, Pacific J. Math. 115 (1984), 165-175.

藤田　岳彦

(1)　教育，その他

一橋大前期にて以下の科目を担当

「数学要論 1」：線形代数学，微分積分学入門

「応用数学」：'93 年度は，組み合わせ数学と最適値問題

「ゼミナール」：'93 年度は，組み合わせ数学，確率論に関するテキストの論講

後期にて以下の科目を担当

「幾何学」：'93 年度は，平面，空間，また n 次元空間における曲線・曲面論．おもに微分幾何的手法について論じ，トポロジーとの関連についても注意した．

学内の仕事として一橋ジャーナル編集幹事

(2)　研究，その他

oretical computer science 61 (1988).

[3] Language theoretical representations of ω-langaugaes, Theoretical Computer Science 66 (1989).

[4] On subclasses of ω-regular languages, (共 著) Words, languages and combinatorics (World Scientific, 1992).

宮地　晶彦

(1) 担当授業

平成4年度の担当は，数学要論1，数学要論2，数理解析B，数学科教育法.

数学要論1と数学要論2では，1・2年生に微分積分と線形代数を講義している．数理解析Bでは，3・4年生を対象に，ルベーグ式積分について講義をしている．数学科教育法では，ベクトル解析や確率などを題材として講義をしている.

(2) 大学の運営に係わる仕事

入学試験制度委員会委員を平成2年度より継続中.

(3) 現在の研究課題，進み具合など

具体的ないくつかの関数空間の性質を，実関数論的な方法で調べている．余り捗々しく進展しているとは言えないが，ユークリッド空間の領域上でのハーディ空間の性質や，領域上で定義された関数を領域の外へ延長することについて，最近多少の結果を得て論文にまとめた.

(4) 所属学会，既発表論文

日本数学会に所属．主な既発表論文は下の通り（いずれも単独の著作).

1) Hardy-Sobolev spaces and maximal functions, J. Math. Soc.

ている.

論理学では，記号論理学の学習を通して，問題・対象の形式化とその限界を明らかにすることを目標に講義している.

計算機概論，論理学ともに，文科系の学生に対する講義なので，具体的例題を通して，講義内容の本質が損なわれることなく学生に伝わるように努力している.

ゼミでは文科系の学生にも興味の持てそうなトピックを選び，関連する書物を輪講形式で読みすすめている.

(2) 授業・研究以外の仕事：

情報処理センター小平分室長．施設整備委員.

Reviewer for Mathematical Reviews.

(3) 専攻分野：ω 言語と有限オートマトン.

有限オートマトンが認識する無限長の語の集合（ω 正則言語）の論理的・位相的特徴付けや，それに基づく ω 正則言語の分類を調べ，いくつかの結果を出してきた.

現在は特に，ω 正則言語のシンタックス・モノイドによる代数的な特徴付けや分類について調べている．また，平行的システムの数学的モデルとして広く研究されているペトリネットについても，興味を持って研究している.

これらの研究を通して，システムの無限動作や平行動作の持つ問題を研究していきたいと考えている.

(4) 所属学会：日本数学会，LA 研究会

研究論文：

[1] Automata theoretical studies of ω- languages and Petri nets (1988) 博士論文（東京工業大学).

[2] Accepting conditions for automata on ω-langugaes,（共著）The-

町田　元

(1)　小平分校において1，2年生を対象として「計算機概論」および「論理学」を担当している．

(2)　多値論理研究委員会委員．

(3)　主な研究分野は，計算量理論と多値論理である．計算量理論では lower bound theory について，また，多値論理では clone の分類について研究を進めている．

(4)　いくつかの既発表論文

[1]　A combinatorial method in lower bound theory, Colloquia Mathematica Societatis János Bolyai, Vol. 42, pp. 597-614, 1986.

[2]　A remark on the compplexity of the knapsack problem, in "Discrete Algorithms and Complexity", pp. 107-118, 1987.

[3]　(with I. G. Rosenberg) A "large" essentially minimal clone over an infinite set, Contemporary Mathematics, Vol. 131 (Part 3), pp. 159-167, 1992.

[4]　(with I. G. Rosenberg) Essentially minimal groupoids, in "Algebras and Orders", Kluwer Academic Publishers, 1993.

山崎　秀記

(1)　担当授業：計算機概論，論理学，およびゼミ．

計算機概論では，計算機の初学者を対象に実習を重視しながら講義している．プログラミングを通して，計算機に対する理解を深めさせるとともに，問題解決に必要な論理性を身につけさせることを主眼において指導し

院の講義・ゼミナールは，私の非力のため受講生の多様な要望に応えられないのがややつらいが，受講生が数学の理解を深め，基礎を身につけるための一助になるよう努めている．

(2) 専攻分野……代数学

現在の研究目標・課題……有限群・有限幾何に見られる不可思議で重要な事実・現象をできるだけ単純かつ自然な形で解明・記述することをめざし，またその過程で新しい魅力的な事柄が浮き彫りにされてくることをも期待している．ここ数年，Mathieu 群・Mathieu デザインの正体を幾分かでも明晰に把握しようと努め，(4)の論文 [3]，[4] はその成果である．

所属学会……日本数学会

(3) 授業・研究以外の仕事

……学内：数学エリア主任，予算委員など

学外：Mathematical Reviews の reviewer

(4) 主な既発表論文

[1] On finite permutation groups of rank 4, J. Math. Kyoto Univ. 13 (1973).

[2] A note on the n-th roots ratio of a subgroup of finite group, J. Alg. 78 (1982).

[3] An elementary and unified approach to the Mathieu-Witt systems, J. Math. Soc. Japan 40 (1988).

[4] 同上 II, Hokkaido Math. J. 21 (1992).

(3)　数理論理学，とくに証明論の諸問題.

(4)　主な論文は

1966年，“An extension of the Craig-Schütte interpolation theorem”, Ann. Japan Assoc. Philos. Sci.

1966年，“A remark on a comprehension axiom without negation”, Proc. Japan Acad.

1973年，“An intermediate predicate logic”, Hitotsubashi J. Arts Sci.

1975年，“On a certain class of recursive functions”, 同誌

1987年，“A Formal Deductive System for CFG”，同誌.

1991年，“A Proof of Skolem's Theorem”，同誌.

1991年，（金子守と共著）“Final decisions, the Nash equilibrium and solvability in games with common knowledge of logical abilities”, Mathematical Social Sciences.

所属している学会は日本数学会，科学基礎論学会，情報処理学会，日本ソフトウェア科学会.

岩崎　史郎

(1)　担当授業……現在，小平では「数学要論1」と「数学要論2」を，国立では「代数学」（後期一般教育科目）および大学院における「経済数学特殊問題」と「ゼミナール」を担当している.「数学要論1，2」では線型代数学と微分積分学の，「代数学」では文字通り代数学の基礎的事項を，その考え方や手法等も含めて，厳密性をあまりおろそかにせず，できるだけわかりやすく生き生きとした自然な形で展開するよう努めている．大学

(3)　現在の課題は，複数の意思決定主体の合理的な行動が，社会的に見ても合理的な行動となる枠組について，ゲーム理論の立場から考察して居る．他の課題として，合理性と他の概念，例へば正義性との関係を分析する作業も進めて居る．

(4)　既発表論文は32点，書籍等は8点．所属学会は，理論・計量経済学会，日本経営数学会，日本交渉学会，日本数学会．

永島　孝

(1)　前期「現代数学C」は集合論の入門．集合と写像は，現代数学の諸分野を学ぶのに必要な基礎概念であり，学生がそれに興味を感じ自ら考えて理解することを願っている．

後期「基礎数学」（経済学部専門科目）では，今年度は位相空間論を基礎からの確実な理解をねらって講義している．

後期ゼミナールではオートマトン理論，帰納函数論，証明論など，数理論理学とその周辺の分野からテーマを選んで，内外の標準的なテキストを読みながら学んでいる．なお，後期ゼミナールや大学院講義には正規の履修手続きをとらない履修者がかなりあり，制度上の問題の解決が望まれる．

大学院の「計算機論特殊問題」（経済学研究科）は年度ごとに，計算機の構造と機能の概説，ソフトウェアの基礎理論たとえば計算可能性，オートマトンと形式言語，証明論などのなかから履修者の希望を配慮してテーマを選んできた．証明論の講義ではゲンツェンの基本定理の竹内の方法による証明を紹介したが，これはどの教科書にも記述のないことで，授業でとりあげたのは世界でもまれなことと思う．

(2)　学外で日本数学会評議員，同受賞候補推薦委員．

ープ　凡人社　1991. 12.）

（口頭発表）

「日本語 CAI の学習記録分析」（日本語教育学会大会　於東京外国語大学 1992. 5.）

（所属学会）

日本語教育学会，国語学会，日本教育心理学会，CAI 学会，日本教育工学協会

数　学

大成　節夫

(1)　（小平）数学要論 1，ゼミ.

数学要論 1 では，線型代数を前半年に，微積分法を後半年に講義して居る．ゼミでは，近年はゲーム理論の入門書をテキストとして使用して居る.

（国立）管理数学，ゼミ（3，4 年）.

管理数学では，意思決定理論，ゲーム理論等の講義をして居る．ゼミではゲーム理論関係の書物や論文を読んで居る.

（大学院）管理数学特殊問題，ゼミ.

講義では，管理数学（専門科目）に続く高レベルの意思決定理論やゲーム理論を扱って居る．ゼミでは，新しく発表された論文等を材料にする事が多い.

(2)　日本経営数学会常任理事，日本交渉学会理事，日本経済学会連合評議員，日本学術会議第 3 部経営学研究連絡委員等.

所属学会は，日本語教育学会，日本独文学会.

三枝　令子

(1)　小平での日本語，国立での研究生のための日本語，教職課程の教育工学.

(2)　学内では，外国人留学生のためのコンピュータを使った日本語教育を軌道にのせること．学外では，(財) 情報処理振興事業協会「日本語辞書の調査研究」に係わるワーキング委員，(社) 日本語教育学会調査研究委員会委員など.

(3)　1　日本語文法の特に副助詞.

　　2　第二言語の聴解能力の調査研究.

(4)　1990. 4. ～1992. 3.

（論文）

「『だけに』の分析」(『言語文化』27巻　一橋大学語学研究室　1991. 2.)

「授業における評価活動の実例」(『日本語テストハンドブック』 大修館書店　1991. 4.)

「名詞の形容詞的ふるまい――名詞述語文についての一考察」(『ソフトウエア文書のための日本語処理の研究11――計算機用レキシコンのために(3)――』 情報処理振興事業協会　1992. 3.)

『日本語聴解問題の改善に関する考察――最終報告書』(日本語教育学会 1992. 3.)

（教科書）

『New Situational Functional Japanese Vol. 1 Notes』『New Situational Functional Japanese Vol. 1 Drills』(共著) (筑波ランゲージグル

は文法クラスと中級クラスを担当している．教材はすべて，受講者のレベルに合わせて学期ごとに自分で作るか，あるいはテレビ番組を教材化して用いている．

共通ゼミナールでは，留学生や日本語教育に関心を持つ日本人学生を対象にして，現代日本語の文法を日本語教育の立場から分析検討し，その面白さを再発見させるようにしている．

大学院では，日本語教育の経験のあるもの，あるいは，自国において日本語教育に従事してきたものを対象に，日本語の文章論及び言語教授方法論の基本文献を講読し，この分野の専門知識や方法論を習得させるようにしている．

(2)　学内では学生国際交流委員会および後期共通科目委員会委員．学外では日本語教育学会評議員．

(3)「留学生のための日本語文法――まとめと練習――」（学内試用版その1，その2）を改定・増補し，決定版を作ること．他に，社会科学系留学生のための文章構成法や漢字学習教材などを考えているが，現在は試用版，あるいは構想の域を出ない．長期的な研究課題は作文教育方法論．あまり進んでいない．

(4)　以前には，日本語とドイツ語とを比較・対照した論文を数点書いているが，一橋大学着任（1986年10月）以降に書いたものは以下のとおり．

「『のだ』の文・『わけだ』の文に関する一考察」（1987．12）『言語文化24号』

『日本語教育ハンドブック』（分担執筆，67-79 p.）（1990．3）大修館書店

「コミュニカティブ・アプローチを駁す――ソフト化社会の理念なき教授法――」（1991．3）『日本語教育73号』

「一橋大学における日本語教育――これまでの10年・これからの10年――」（1992．3）『一橋論叢1992年3月号』

学外活動では，研究対象である新潟県佐渡郡及び東京都八王子市・板橋区他の芸能の普及公演活動・後継者養成・現地の研究者に助力している．

(3)　長年調査してきた佐渡他の説経節・文弥節の研究を纏めるのを急がねばと思っている．又，この活動を通じて収集してきた貴重な伝統芸能のレコード化を図り，広く公にし，又しかるべき公的機関での永久保存化を期している．

この他，目処はたちながら，上記支援活動や教育に力をとられ，時間を注げずに纏めるに至らぬものがあり，焦燥感を抱いている．

(4)　'89年及び'92年刊岩波書店『新日本古典文学大系　室町時代物語集』上下所収の中世物語の注釈．

中世文学会，歌謡文学会，東大中世文学会ほかに所属．

日本語・日本事情

松岡　弘

(1)　小平と国立での留学生に対する日本語・日本事情教育，国立での共通ゼミナール（日本語教育），大学院（教育社会学：日本語教授方法論）．

小平での1年生を対象とした一般日本事情では，高校の日本史教科書にそって，一般日本人が常識として持っている日本史の内容を，テレビから録画編集したビデオを利用しながら，重点的に分かりやすく伝えるようにしている．作文教育は自作の教材にもとづき，毎週宿題を提出させ，添削を行っている．

国立での日本語教育は，交換留学生や大学院研究生が主な対象で，現在

は何もしていない.

(3)　学生の時から江戸時代後期の校勘学者狩谷棭斎の生涯と業績について調べてきた. 現在,『狩谷棭斎年譜』と, その記載の根拠を解説した『狩谷棭斎伝』とを執筆している. ただし, 完成はいつになるかわからない. 別に, 上記二書の内容を要約して記述した『狩谷棭斎』を, 吉川弘文館人物叢書の一冊として, 明年中に刊行するつもりで, 目下, 仕上げを急いでいる.

(4)　棭斎に関する最近のものをあげておく.「棭斎雑記――津軽屋三右衛門襲名前後の事情　付, 隠居の時期・隠居後の通称」(『言語文化』25 1988),「棭斎雑記――津軽屋三右衛門襲名前後の事情　補遺」(同 26 1989),「狩谷棭斎の西遊　其一　付, 棭斎の出生地」(同 27　1990),「棭斎没後の津軽屋」(同 28　1991).

秋谷　治

(1)　1, 2年（小平）には国語, 日本文学――どちらも主に日本古典文学・古典芸能の講義, 講読――, 及びゼミナール――日本文化に関する内外の著作の演習――を行なってきた. 3, 4年（国立）には日本古典文学の講義とゼミナール――主に日本近代文学・映画・現代演劇を学生の希望に則し（専門は中世・近世初期の古典文学なので, 僻地の何でも屋医者たらんと努めているが限界を感じている）――を行なってきた.

現在の学生は情報過多の割に現実を把握する力が不足がちなので, 空理空論にならないよう, 又徒らに知識を詰め込む前に何が重要かを弁えるよう, 又それが創造力や想像力の元となるよう指導することを心懸けている.

(2)　学内では諸委員.

国語

梅谷　文夫

(1)　一般教育科目の日本文学・国語ならびにゼミナール，専門科目（社会学部）の日本文学ならびにゼミナール，および大学院社会学研究科の文芸社会学ならびにゼミナールを，連年または隔年で担当している．

一般教育科目の日本文学においては，日本人が人間存在をどのようなものとして認識してきたか，また，日本人の価値意識にはどのような傾向ないしは特徴があるかを，各時代の作品を通して理解してもらうことを眼目にして，教材を選び，講義してきた．

同じく国語においては，簡潔で，しかも委曲を尽くしている文章を名文とする伝統的な文章観を理解してもらうために，古来名文として定評ある作品を選んで講読してきた．

専門科目の日本文学においては，近世文学に関する諸問題の解説と，近世文学史上意義ある作品の講読とを，交互に行なってきた．

文芸社会学においては，修士課程の学生のために，文献学的研究方法，特に，研究資料としての書籍の鑑別（資料批判）と校勘（本文批判）の理論と実際を，個々の作品の具体的事例に即して解説してきた．

ゼミナールは，学生自身の研究課題に即して個別に指導してきた．共通の教材をめぐって報告・討論するようなことは，学生の研究領域が一致することがほとんどないので，やったことはない．ただし，前期のゼミナールにおいては，当方で適当な教材を用意しているが，最近は古典を読もうとする学生が少なく，成立しないことがある。

(2)　役職を勤め得るような器でないので，特記にあたいするようなこと

坂井　洋史

(1)　(小平)　中国語初級，中級，前期ゼミナール.

(国立)　共通ゼミナール，社会学部・中国文学（不定期に担当).

既存の思考の枠組への安易な傾斜を戒め，知の選択肢を多様化する手段として，外国語及び外国文化への接触を位置付け，指導している．学生にとって，初修外国語は兎角技術的な練習に終始すると思われがちだが，知的な関心とは好奇心を以て自ら開拓に努めるものと考えてほしい.

(2)　(学内）語学ラボ運営委員.（学外）東大東洋文化研究所研究班研究協力．中国福建省泉州黎明大学巴金文学研究所客員研究員.

(3)　中国現代の作家・巴金を軸に，現代中国の非マルクス主義的傾向(特にアナキズム）の文化界における系譜の追跡，再現を当面の研究目標とする．その一環として，アナキズムの教育救国思想への変質についての関心から，近年は陳範予遺稿の校訂整理作業に携わり，部分的な成果を公表してきた.

(4)　主編訳『中国アナキズム運動の回想』(総和社，1992年）では，往年のアナキストの回想録の収集，配列を通じて，中国アナキズム運動の思想史的展開を独自の視点に拠り鳥瞰した．巴金に関する主な論文として「巴金を読む」(《季刊中国研究》第16号，1989年)，「巴金と平凡人」(『魯迅論集』汲古書院，1992年所収）など．1989，91，92年に各々中国で開催された巴金関連の国際学会に参加，報告を行なってきた.

（所属学会）　日本中国学会，現代中国学会，中国語学会，東大中国学会.

松永　正義

(1)　小平では1年の中国語と中国文学．中国文学は，古典から現代までの作家について気ままに読みながら，中国の知識人の生き方について考えているつもり．

国立では中国語I（初級），中国文化，ゼミナール．中国文化では，台湾史を辿り，ゼミナールでは，前半は劉暁波の文章を，後半では劉心武のエッセーを読んでいる．

(2)　なし

(3)　現在最大の宿題は，共訳の『台湾現代小説選』（研文出版，III集まで刊行）のIV集，V集を出すこと．台湾社会の急激な変化の中で，文学がどうなっていくのかがつかみきれていないことが，これまでいくつかを訳しながら没にしてきた原因なのだが，そろそろなんとかしなければならないと考えている．

(4)　これまで，「近代文学形成の構図――政治小説の位置をめぐって」（『東洋文化』61号，1981．3）などで中国の近代文学について，「台湾領有論の系譜――1874（明治7）年の台湾出兵を中心に」（『台湾近現代史研究』1号，1978．4）などで日本人の台湾認識について，「郷土文学論争（1930～32）について」（『一橋論叢』101巻3号，1989．3）などで台湾の文学史について，と3つの方向でものを考えてきた．当面は台湾の文学史についてもう少し考えていきたいと思っている．

所属学会は，日本中国学会，現代中国学会，日本中国語学会，東大中国学会．

読む，書く練習を中心に学生を指導した．

国立の中国語第三では，『高級口語』を教材に，“微型小説”，“雑談”等の小品をも取り上げ，読解力ばかりではなく，作品についての感想をも書かせる等，作文の練習も行った．

国立の共通ゼミナールでは，中国文化，中国近代社会，中国近代文学の講義を行いながら，“五・四”運動前後の中国文化，社会，文学に関する幾つかの問題を中心に重点的に討論を行った．

(2)　NHK 教育テレビ，東京大学，京都大学で講演を行った．日本中国語学会第 41 回全国大会，日本中国学会第 43 回全国大会，漢字文化圏の歴史と未来国際学術会議（横浜），東洋三国語言政策国際学術会議（韓国）等に出席し，学術報告を行った．

(3)　A．中国当代語文生活の状況及び問題についての研究（中国当代の言語，文字の使用状況及びその使用過程に普遍的に存在している問題に関する研究）．幾つかの研究論文は既に出来ており，一冊の本にまとめて出版する予定である．

B．中国の商売言語についての研究（北京・上海・天津・武漢・重慶等の地方の商売言語を 400 語句収集して，これらの資料を例に，中国の商売言語の発生，変化，及びその語音，語彙，文法，修辞，風格，音楽等に対して分析，研究を行う）．研究書として出版する予定である．

(4)　①「論漢字簡化」（中国『語言文字応用』雑誌　1992 年 2 号掲載）②「漢字と漢字文化の関係を略論す」（1991 年 11 月横浜で開催された“漢字文化圏の歴史と未来国際学術会議”において発表，中国「語文建設」1992 年 6 号掲載）

誌・文化史，民族誌3ではロシア民俗学史について講義，ゼミナールでは，高取正男，坪井洋文，岡正雄，千葉徳爾らの著作を講読している（1992年度）.

(2)　日本ロシア文学会（評議員），同学会関東支部運営委員.

(3)　ロシア民俗学に関わるロシアの歴史と文化．実証主義としての民俗学の精神史の再考.

(4)　著書『ロシア文化の基層』（日本エディタースクール出版部，1991年）．訳書ステブリン＝カメンスキイ『神話学入門』（菅原邦城氏と共訳，東海大学出版会，1980年），オポローヴニコフ『ロシアの木造建築』（井上書院，1986年），ネクルィローヴァ『ロシアの縁日』（平凡社，1986年），論文「ロシアにおける民俗学の誕生」（『一橋論叢』108巻3号，1992年9月）など.

所属学会は，日本ロシア文学会，ロシア史研究会，ロシア・フォークロア談話会，「百章」読書会.

中国語

陳　章太

(1)　小平で中国語2年，国立では中国語第3及び共通ゼミナールをそれぞれ担当している.

小平の中国語2年では，『初級漢語課本』を教材に，中国語の基礎知識，中国語の主要な特徴及び中国語の常用語彙とその基本文法について教授し，中国語の発音，会話，作文及び翻訳の訓練を行い，中国語の聴く，話す，

(2)　学内においては大学図書館外国雑誌センターの委員，学外においては北海道大学スラブ研究センターの運営委員をつとめ，さらに日本ロシア文学会（理事），ロシア史研究会，ロシア・フォークロア談話会，「百章」（ロシアの16世紀の法律）読書会などに加わっている．

(3)　ロシア文化一般に関心をもち，とりわけ，中世ロシア文学，ロシア旧教徒の歴史，日本とロシアの文化交流の歴史などについて研究をすすめている．これらのテーマについての国際的な研究集会にもしばしば出席している．

(4)　所属学会は日本ロシア文学会，ロシア史研究会，Japanese Society for Slavic and East European Studies, American Association for Advancement of Slavic Studies.

著書は「聖なるロシアを求めて」（平凡社 1990），「おろしや盆踊唄考」（現代企画社，1990）．訳書として「ロシア中世物語集」（筑摩書房，1970），「ロシア民話集」（岩波書店，1987），「ロシア英雄叙事詩ブィリーナ」（平凡社，1992）など．ほかに論文として「ロシア民衆の宗教意識」（岩波書店「世界史への問い」6巻，1990），「『イーゴリ軍記』と『平家物語』——色彩の構造から見た比較」（「むうざ」誌，1992）など．

坂内　徳明

(1)　（小平）　ロシア語1年クラス，2年．初級の文法，中級のロシア語読本を担当．

（国立）　ロシア文化，社会人類学特論と民族誌3（半年交替），ゼミナール．ロシア文化では，ラッセル，エリクソン，ゲルツェンらの手になるロシア文化論の講読，社会人類学特論ではペテルブルグの歴史と民族

çaises No. 58, Société Japonaise de Langue et Litterature Françaises, 1991.

「作家はいつ書き終えるか」,『一橋論叢』, 1992年9月号.

ロシア語

中村　喜和

(1)　小平においては，ロシア語文法の基礎，ロシア語作文を担当している．ロシア語は英語・ドイツ語・フランス語・中国語とならんで選択必修課目として課されるものであり，ロシア語のために毎年2クラスがもうけられている．このクラスの学生，ならびにいわゆる第3外国語として選択する学生に初歩の文法を教授し，その文法を修得した2年生に作文を練習させるのが主たる内容である．ゼミナールではロシア語で書かれたテクスト（ここ数年はロシア史に関する書物）を教材として読解力を訓練している．

国立においては，いわゆる共通課目としてのロシア語第2と社会学部のロシア文学原典講読を担当している．前者ではロシア語文法の基本を学びおえた学生を対象として，ロシア語のテクストを正しく読みとる力をつけることを目的とした講義を行なっている．1991年度においてはソビエト諸民族の民話集，1992年度においては現代ロシア作家の短篇集をテクストとしている．

国立においては上記とは別に大学院の院生を対象としてロシア文化史を中心として講義ならびにゼミナールを行なっている．

国立での仏文化講義は，近代小説の誕生と変遷を，フィクションの概念と技法の面から扱っている．学生は，理論的な話は非常によく理解しているようだが，作品そのものの読書が十分でないので，講義がほとんど一方的な文学史的知識の伝達におわってしまっているのが残念である．

(2)　特筆すべきことはなし．

(3)　20世紀前半のフランス文壇をリードしたNRFの文学運動の初期の段階（1909年創刊～1920年代）と，マルセル・プルーストとのかかわりについての研究．

(4)　"De *La Fugitive à Albertine disparue* : le destin en éclipse de l'avant-dernier volume d' *A la recherche du temps perdu* —— évolution du roman proustien après 1914——", t. I et II, thèse de doctorat presentée à Paris IV, déc. 1989.

「『逃げ去る女』から『消え去ったアルベルチーヌ』へ——『失われた時を求めて』の変貌の一側面（上）——」，東大『仏語仏文学研究』第3号，1989.

「『逃げ去る女』の行方——『失われた時を求めて』の変貌の1側面（下）——」，東大『仏語仏文学研究』第4号，1990.

"Le reliquat inédit", *Bulletin d'informations proustiennes* No. 21 (1990), Presses de l' ENS, 1991.

"Le destin en éclipse de l'avant-dernier volu*me d' A la recherche du temps perdu*", *Bulletin Marcel Proust* No. 40 (1990), Société des amis de Marcel Proust, 1990.

"Sur l'existance d'une soirée du contrat de fiançailles chez la princesse de Germantes", *Bulletin Marcel Proust* No. 41 (1991), 1991.

"L'Apparition de l' *Albertine disparue* de Grasset —— le destin de l'épisode de l'article du *Figaro*——", *Etudes de lague et littérature fran-*

中野　知律

(1)　小平でフランス語の初級文法（1年），講読（2年）およびゼミナール（1・2年），国立でフランス文化講義（3・4年）を担当.

初級文法では，フランス語の基本的な読み書きを可能にする文法知識の習得と応用をめざす.

講読では，文学作品（20世紀小説）と社会学論文（19世紀末—20世紀初頭の女性のあり方）をそれぞれ1コマずつ設けた．社会科学系のテクストについては（当然のことながら）かなり積極的な反応が見られるが，文学作品の講読については，自ら選んで授業に登録しているはずなのに，教師が強いなければ自主的な出席も見られず，学生の自己反省を強く促したいところである．勿論，ごくわずかではあるが，扱う作家・作品そのものに関心をもって参加している学生がいることも確かではあるが．しかし，概して学生の興味の幅は狭く，世の流行に左右されるところが大きいように思われる．長い目で見てしなやかな思考力を養うためにも，さまざまな文化の基礎知識について啓発する1・2年の授業への，学生のより積極的な姿勢が望まれる.

ゼミナールでは，今日の女性研究の隆盛のもととなったボーヴォワールの著作を読んでいる。参加している学生はほぼ男女半々の数で，多角的な視点からの具体的な意見の交換があり，興味深い．ただし，テクストの精読に関心が薄いのは問題．テクストに向きあうことなしには，既知の体験に呼応するところしか結局読み取れず，未知の，自分とは違ったものの見方を書物から正確に吸収し，新たな認識の地平を切り開くことは難しいと思われる.

で，研究がこれまでよりは進捗するのではないかと期待している（あるいはさらに遅れる危険もあり？）とりあえずは長年気になっている問題作『十月の夜』(1853年）について，〈首都の文学〉とでもいうべきジャンルとの関連から論じてみたい．

(3)　過去二年間の主な研究論文，評論として以下のものがある．

1.《Nerval feuilletoniste : du compte rendu théâtral au récit de rêve》, *Etudes de Langue et Littérature françaises*, No. 58, mars 1991, p. 107-121.

2.「ネルヴァルと〈東方紀行〉の系譜」『フランス文学における旅の観念と世界像の変容』平成1・2年度科学研究費補助金一般研究（B）研究成果報告書，東京大学文学部，1991年3月，P. 33-56.

3.「ロマン派的〈廃墟〉をめぐる覚え書——ヴォルネーからジェラール・ド・ネルヴァルへ」邑書林『邑』創刊号，1991年春，p. 14-19.

4.「ジェラール・ド・ネルヴァルと夢の共有」『仏語仏文学研究』第6号（菅野昭正先生退官記念特集号），1991年6月，p. 25-47.

5.「扉としての書物——ブルトンとジェラール・ド・ネルヴァル」青土社『ユリイカ』1991年12月号，p. 170-182.

6.《La généalogie du feu : le roman familial chez Nerval》, *Equinoxe*, No. 8, 1991, p. 75-82.

7.「マンディアルグの美味礼讃」青土社『ユリイカ』1992年9月号，p. 100-106.

また現代フランスの作家ジャン＝フィリップ・トゥーサンおよびエルヴェ・ギベールの小説の翻訳を集英社からあわせて四点刊行したのをはじめ，フランス文学・映画関係の邦訳が数点あり，書評，映画評，文学・映画関係の紹介記事等も二年間で合計四十本ほど発表している．その一部は『映画の快楽』『短篇小説の快楽』（角川文庫，いずれも共篇）に収録．

seau——" パリ第四大学博士論文（フランス文学），1991.

—「ルソーにおける言語の起源と人間の本性—『人間不平等起源論』と『言語起源論』—」.『仏語仏文学研究』（東京大学仏語仏文学研究会），7号，1991.

——"Musique et société——Anthropologie et théorie musicale chez J.-J. Rousseau——", *Etudes de langue et littérature françaises*, No. 60, 1992.

——"Métaphores et notions morales——Rousseau contre la théorie sensualiste de l'origine du langage——", *Equinoxe*, No. 9, 1992.

［所属学会］ 日本フランス語フランス文学会．日本18世紀学会.

野崎　歓

(1) 仏語2年2クラスの1つは仏作文で，基本文型を教科書に沿って復習しながら，随時，さまざまな課題で学生に自由作文を書いてもらい，採点，添削をしている．もう1つのクラスでは新聞・雑誌の記事を読む練習を行っている．仏文学ではアンドレ・ブルトンの諸作を中心に，現代文学，美術の淵源の一つとしてのシュルレアリスムについて講義．ゼミナールは昨年から映画史研究をテーマに掲げ，今年はアルフレッド・ヒッチコックをとりあげて，ハリウッド的映画文法の成立を探っている．トリュフォーによるインタビューをテキストとし，ロメール、シャブロルやスポトー，ウッドらの研究を随時参照しながら，各作品についての討議を重ねている．

(2) 『東方紀行』(1851年）以降のジェラール・ド・ネルヴァルの作品を，19世紀中頃のフランス文学界における〈散文〉の変容という視点から読み直す作業をのろのろと継続中．最近『東方紀行』翻訳の任を負ったこと

増田　真

(1)　小平でのフランス語と前期ゼミ．1年生の授業ではフランス語の初級文法と基本的な表現をなるべく確実に習得させることに重点を置き，2年生の授業では中級の講読を実施している．今後，1年生の初級文法でも口頭表現の練習を導入したり，2年生の授業では文学テキストだけでなく会話，聞き取り，新聞の抜粋および歴史や社会科学関係の文献の講読などの手段によってフランス語教育の多角化をめざす．

前期ゼミの今年度のテキストはルソーの『人間不平等起源論』を取り上げ，その精読を通して著者の思想や同時代の思想的文化的状況の考察をめざしている．この授業は，古典を読むことの意義を理解しその方法を体得することをも目的としている．

(3) ルソーを中心とする18世紀フランスの思想と文学．過去数年間は特にルソーの政治思想における言語論の位置づけを主な研究課題とし，それをパリ第四大学における博士論文にまとめた．もちろん，その一環としてルソーの言語論とその時代の人間論や言語論との関係も考察し，さらに，ルソーにおいて言語論と密接に関連する音楽論がどのように発展し，政治思想とどのような関係にあるかなどの問題にも触れた．この研究は単にルソーの言語論の解釈に終始するものではなく，18世紀フランスにおける政治と言語や美学との関連の考察に発展する予定のものである．目下，今までの研究の整理，深化を図るとともに18世紀フランス思想の他の側面（特にディドロの思想）の研究の準備をしている．

(4)　［最近の主な研究業績］

—“La diversité originelle des langues et des sociétés dans l'*Essai sur l'origine des langues*”, *Etudes Jean-Jacques Rousseau*, No. 2, 1988.

—“Lois et langage—Linguistique et politique chez Jean-Jacques Rous-

秀なのか．おそらくその両方であろう．

国立校地・後期では，ゼミナールを担当．フランス・アンシャンレジーム期，特に18世紀の社会・文化に関する文献を扱っている．今年度(1992）はA. L. Thomas, *Essai sur les femmes*（1772)およびこれをめぐるDiderotやMadame d' Epinayのテクスト．主題がフェミニスムという今日的なものであるせいか，やや難度の高いテクストであるにもかかわらず，参加者諸氏の学習態度からは非常な熱意がうかがわれ，その真摯さに目頭が熱くなるほどである．

ちなみに担当コマ数は合計6であるが，多すぎる．

(2)　学内では，語学ラボラトリー運営委員会委員長（1992年12月7日現在)．

(3)　今のところは，フランス18世紀の作家ラクロの作品および当時の社会文化に関する複層的な記述を，課題とする．目下ラクロおよび18世紀関係の論文，翻訳をいくつかかかえている．現に（1992年12月7日）執筆中の論文の締切が明後日に迫っており，本当はこのような「自己点検評価報告」などを書いている暇はないのである．

(4)　決して多くはない既発表論文については，「フランス語フランス文学研究要覧」や学術情報センターのデータベース「研究者ディレクトリ」参照のこと．これ以外に，1990年教文館刊の翻訳「危機のユグノー」や，1993年2月白水社より刊行予定の共編著「現代フランス語辞典」などがある．日本フランス語フランス文学会，Société française d'étude du dix-huitième siècle所属．

—日本フランス語フランス文学会

佐々木　滋子

(1)　フランス語，ゼミナール

(3)　ステファヌ・マラルメ研究

(4)　《マラルメの *Hérodiade* について——初期の構想に属する詩の誕生の主題》昭和57年10月『フランス語フランス文学研究』41号日本フランス語フランス文学会

《マラルメの『言語の科学』》昭和60年6月『一橋大学研究年報　人文科学研究』24号

《ジュリア・クリステヴァの言語理論について——棄却の概念の精神分析学的アプローチ》昭和63年4月『一橋論叢』99巻4号

《国家と詩人》平成1年12月3年2月『言語文化』26，27号

《『イジチュール』あるいは夜の物語》平成3年9月『一橋大学研究年報人文科学研究』29号

所属学会　日本フランス語フランス文学会

佐野　泰雄

(1)　小平校地・前期では，1年生および2年生のフランス語を担当．学生の学習達成度はかなりのもので，1年生でこんなにフランス語の発音が良くていいのか，2年生でフランス語がこんなにわかっていいのか，と驚くほど高い習得度を示す学生も稀ではない．学生が優秀なのか，教師が優

横張　誠

(1)　前期過程の仏語，後期過程の仏文学原典講読，大学院経済学研究科の各国経済思潮特殊問題（仏）を担当．前期では，将来人文・社会科学の原典が理解できることを目指す．仏文学原典講読では，19～20 世紀の仏文学作品に親しむのみならず，人文・社会科学の側から文学テクストを批判的に読解する訓練を行っている．大学院では，シャルル・フーリエの著作を精読しつつ，フランス初期社会主義の見直しをしている．

(2)　フランス語エリア主任，語学研究室運営委員会委員，視聴覚教育委員会委員

(3)　ボードレールを中心に，19 世紀中期フランス文学・芸術・思想

(4)　著書

—『侵犯と手袋—『悪の華』裁判』，朝日出版社，1983 年

主たる翻訳

—『科学の名著 10 パストゥール』（共訳），朝日出版社，1981 年

—J.＝F. リオタール『経験の殺戮』，朝日出版社，1987 年

最近の論文等

—「ベルギーのボードレール，ボードレールのベルギー」，「フランス手帖」，10 号，1989 年

—「最後に訪れた街は街ではなかった」（ベルギーのボードレールとプルードンの関係を扱う），「鳩よ！」，1991 年 1 月号

—「資本主義の未来—初期社会主義の見たユートピア」（対談），「現代思想」，1991 年 8 月号

—「ボードレールをめぐるベンヤミンのいくつかのモティーフについて」，「現代思想」，1992 年 12 月臨時増刊号

所属学会

文学．文盲の大衆を前にして《書く》とは何か，なぜ旧宗主国の言葉（フランス語）で書くのか，アフリカ的《生》の哲学と西欧的《知》の戦略はそもそも軌を一にするものなのか等々，多くの問題と矛盾を抱えた黒人アフリカは地球時代を生きる現代人にとって考えるテーマの宝庫である．

③以上の専門分野に学生・研究者の卵を導くために，欠かせないのがフランス語の力である．そのために初級から，中・上級まで語学教育に力を入れてきた．初等文法書および中・上級向けの教科書の出版，仏和・和仏辞書の編纂もそうした教育分野への寄与の一環である．

(3)　論文・出版物：上記専門分野に限り，過去2年の仕事を中心に紹介．

①「ペネロペの織布―『カイエ』のヴァレリー」（岩波書店，雑誌『文学』1991年春季号）

Essai d' une analyse de La Soirée avec Monsieur Teste (*Bulletin des Etudes Valéryennes* ［フランスの専門誌］, N° 56-57, 1991)

「ヴァレリーの愛，その後」（東京大学，雑誌『仏語仏文学研究』第7号，1991年）

②「カマラ・ライと黒人アフリカ文学」（1990年4月～9月NHKラジオ口座応用編のラジオ放送とテキストの連載）

「仏語表現黒人アフリカ文学概説」1～6（同上）

「アフリカの〈夢〉」（岩波書店，雑誌『文学』1991年冬期号所収）

③『ロワイヤル仏和中辞典』，『プチ・ロワイヤル仏和辞典』，『プチ・ロワイヤル和仏辞典』（1993春刊行予定）などの共著．

『コレクション　フランス語―読む』（1992年，白水社）

教科書版『テスト氏との一夜』（1992年，白水社）

恒川　邦夫

(1)　担当科目：

［小平］1年生：初級フランス語（文法クラス）

2年生：中級フランス語（読本クラス）

［国立］3，4年生：共通ゼミナール

＊《フランス現代思想》研究．これまでレヴィ＝ストロース，ドゥルーズ，ガタリ，フーコー，ジラール，バルトなどをテクストに選んで読んできた．

大学院生：講義・ゼミナール

＊文芸社会学の枠組みの中で，テキスト分析，生成研究、文芸批評史などを扱ってきた．

NB 上記以外に，年によって，前期ゼミナール（小平），フランス語第一，第二，原典講読，フランス文化（以上国立）などを担当する．

(2)　専門：①ポール・ヴァレリー研究②仏語表現現代黒人アフリカ文学研究③仏語教育・辞典編纂（教科書，仏和辞典，和仏辞典の編纂）．

①ポール・ヴァレリーは1945年に75歳で没したフランスの詩人・思想家．公刊された作品の著作権が消滅する没後50年が数年先にせまっており，新しい翻訳，解説による再読の気運がたかまっている．文学・哲学など人文科学にとどまらず，数学・物理学・化学・生物学など純粋科学・自然科学にも広い関心を持つ思想家なので，これからは後期ゼミナールや大学院のテキストにも積極的に取り上げていきたいと思っている．

②1960年に旧宗主国（フランス）から相次いで独立した黒人アフリカ諸国（セネガル，コート・ジヴォワール，カメルーン，ギニアなど）の若い

und Wissenschaft als >Ideologie< をとりあげた.

(2)　日本独文学会文化ゼミナール実行委員.

(3)　現代における文学・芸術・思想の問題を，特にヴァルター・ベンヤミンの著作を手掛かりに考察する仕事を行っている．昨秋の日本独文学会におけるベンヤミン・シンポジウムにパネラーとして参加し，「大都市とモデルネの文化—ベンヤミン・ジンメル・クラカウアー」と題する発表を行った．これをもとにした論文を『一橋論叢』1993年3月号に発表予定である.

(4)　最近発表した論文としては，「ヴァルター・ベンヤミンにおける解釈の理論」(1)～(3)，高知大学学術研究報告第38～40巻（1989～1991）がある．また近刊予定のものとしては上記の他に，"Das Ende der schönen Kunst. Zu Walter Benjamins Kunsttheorie", in: Josef Fürnkäs u. a. (Hg.) : Das Verstehen von Sehen und Hören. Aspekte der Medienästhetik, Bielefeld (Aisthesis) がある.

所属学会は，日本独文学会.

フランス語

海老坂　武

(1)　小平でのフランス語，ゼミナール.

(2)　特に見るべきものなし.

(3)　サルトル研究.

(4)　特に見るべきものなし.

1992. 7.　ゲルマン語案内（講演要旨）（学習院大学言語研究所紀要 14 号）
1992. 9.　ゲルマン語数詞研究 I（論文）（一橋論叢 9 月号）
1992.10.　古高ドイツ語シンタックス研究の現状（発表）（日本独文学会）
教育活動（1992 年度）：
講義 6 コマ，ゼミナール 1 コマ，非常勤 4 コマ
ゼミナールのテーマ：中世ドイツ語，ドイツ語史

久保　哲司

(1)　小平でのドイツ語，国立での共通ゼミナール

一年次のドイツ語では，文法の骨組みを習得した後，あるいはそれと並行して，おもに読解と作文の練習を行う．二年次のドイツ語においても，読解と作文の練習が中心となる．読解のテキストとしては，文学作品，ドイツ事情，ヨーロッパ文化史に関するものなどを用いている．

外国語教育の目的は，「他者」を理解するための知識を学び，そのうえで自分の意見をもち，それを表現すること，またそのことを通じて自己認識を深めることにあろう．単なる旅行会話，買物会話は，むしろ受動的語学に過ぎず，そのレベルでは外国人と付き合ったことにはならない．要するに実質のあるコミュニケーションを行うことが重要である．このような考えから，授業では読解と作文を中心に行うのがよく，またそれは上に述べた意味でのコミュニケーションにおけるヒアリングと会話の基礎にもなると思われる．

国立におけるゼミナールでは現代ドイツの文学・思想に関するテキストを読んでいる．本年度の夏学期には Max Horkheimer : Zur Kritik der instrumentellen Vernunft を，冬学期には Jürgen Habermas : Technik

化とことば」を使用．毎回宿題を課し添削を行った．名訳にあうことしばしばで私自身にとって刺激になった．

(2)　学内ではLL委員会，一橋論叢編集委員会など．学外では日本独文学会学会誌「ドイツ文学」編集委員．月刊「基礎ドイツ語」執筆．

(3)　話者が「事態」や「事態の関与者」，「聞き手の知識」をどう認識するかという話者の認識のありようと言語表現とのかかわりの研究．「視点」や「心理的距離」「感情移入」の他に「メンタルスペース」が有力な分析手段の候補であると考えている．目下，第20回語学ゼミナールで行った口頭発表"Die Kognition und Absicht des Sprechers——im Fall von Relativsätzen"を加筆修正中．

(4)　論文「ドイツ語における関係代名詞節の制限的用法と非制限的用法について」(『言語文化』25号1988年)

報告「海外の言語学〈ドイツ〉」(月刊『言語』1988年10月号)

書評「*der die das* als Pronomen」(『言語文化』29号1992年)

所属学会：日本独文学会

飯嶋　一泰

研究活動（1991年～1992年）：

1991. 2.　mindestens と wenigstens（研究ノート）（言語文化27号）

1991. 3.　クラウン独和辞典（共著）（三省堂）

1991. 3.　Werner König: Atlas（書評）（ドイツ文学86号）

1991.10.　ゲルマン語案内（講演）（学習院大学言語研究所）

1991.11.　ゲルマン語における数詞について（発表）（ドイツ言語理論研究会）

叢　1991年4月；「神々と人間の断絶，ヘシオドスの『名婦伝』におけるゼウスの意図」言語文化28，1992年；「パルチヴァールの悲劇的あやまち—『ピロクテーテス』におけるネオプトレモスとの比較—」小塩節先生還暦記念論集『ヨーロッパ精神とドイツ—出会いと変容—』郁文堂1992年；「ヘーラクレースの弓と聖杯」ペディラヴィウム36号　1992年12月書評：岡道雄『ホメロスにおける伝統の継承と創造』西洋古典学研究38，1990年掲載.

(3)　西洋文化の源泉のひとつであるギリシア・ローマ古典とドイツ中世・近代との関わりに興味がある．文学ジャンルでもあるが，それ以上の概念性を持つ悲劇の観念の変遷と差異を比較検討して，それぞれの時代と文化の特長を探る作業にかかっている.

(4)　ドイツとの国際交流専門委員会委員，学生国際交流委員会委員，一橋大学海外留学奨励金運営委員会委員，後期一般教育科目等委員会委員，一橋論叢編集委員会委員.

日本独文学会編集委員・文化ゼミナール委員・文化ゼミナール記録論文集編集委員を歴任．日本西洋古典学会員.

三瓶　裕文

(1)　小平では，一年生は，ドイツ語の基本的な文法・語彙の習得をめざし，いわゆる文法読本を用いて授業を行っている．二年生夏学期は，一年次の文法事項の確認を主眼とし，教科書は，ビデオ教材「統一ドイツの首都ベルリン」とラジオ講座をもとにした「ザクセン，チューリンゲンへの旅」を用いた.

国立では，ドイツ語初級と上級を担当．ドイツ語上級では「ドイツの文

ドイツ語を未修外国語とする学生を主な対象に語学授業，およびドイツ文学講義（1992年度は中世叙事詩に見られる運命観・恋愛観）．共通ゼミナールではドイツ文献講読．

(2)　ドイツ文学・西洋古典学専門．

著書 Eros und Seelenruhe in den Thalysien Theokrits, Würzburg 1980　翻訳書「老いの豊かさ」1981年，新教出版社（"Dein Leben lang", von H. J. Schultz）論文 Hermeneutik und Ideologiekritik ドイツ文学 65, 1980年；Das Problem der Authentizität der Erfahrung bei Kleist, in : Comparative Culture（ICU）4, Tokyo 1982, 15-23；「心に喜びを与えるもの，古代ギリシャ詩人とドイツ近代詩人の自然描写における比較」ペディラヴィウム12号　1982年；Naturbegriff und Kunsttheorie bei Arno Holz, in: Humanities, Christianity and Culture 17, Tokyo 1983, 195-220；「アダムの罪とオイディプスの見誤り」エポス8号 1983年；「テオクリトスの牧歌における主題としてのエロース」西洋古典学研究 32, 1984年；「古代と近代における悲劇的なるもの」言語文化 23, 1984年；「サッフォーのうたう美へのエロース」エポス9号 1985年；「ホメロスの英雄たちは神々の操り人形か」ペディラヴィウム22号 1985年；「テオクリトスにおける自然描写」言語文化 25, 1986年；Zur Theorie des Tragischen bei Aristoteles, in : Journal of the Faculty of Letters, The University of Tokyo Aesthetic, Vol. II, Resonantia Dialogica, Tokyo 1986, 119-129；「女神ヘーラーの嫉妬」エポス10号 1987年；Zum Ausdruck von Seelischem durch die Beschreibung von Naturvorgängen im Manyoshu, in : Hitotsubasi Journal of Arts and Sciences Vol. 29 No. 1（whole Number 29）December 1988；「悲劇的あやまち　ハマルティヤ」ペディラヴィウム31号 1990年；「我は秋山，人と自然のかかわり」エポス11号 1990年；「ニーベルンゲンの悲劇」一橋論

国立の学部共通ゼミナールでは，「ドイツ歌謡研究」という大看板のもと，参加者の関心に添いながら，さまざまなテーマを取り上げている．ここ数年では，「ドイツ青年運動と歌声運動」，「『魔笛』」，「さまざまな『サロメ』」，「ドイツ民謡」など．

(2)　学内での各種委員のほか，学外では主としてドイツ語圏音楽文化についての原稿執筆，講演，放送番組の製作・出演など．日本リヒャルト・シュトラウス協会事務局長．武蔵野文化事業団企画専門委員．

(3)　ドイツ語圏のさまざまな〈歌の文化〉のありようを，歴史的・社会的・政治的関連を重視しながら，総合的に探ること．具体的研究対象としては，モーツアルト，R・シュトラウス，ロマン派歌曲，民謡，大道芸人の歌，オペラ，オペレッタ，流行歌，キャバレーの諷刺歌，第三帝国の音楽等．

(4)　主要な著書，論文は次の通り：「モーツアルト――カラー版作曲家の生涯」（新潮文庫）1984年／「ゲーテとリヒャルト・シュトラウス」（「ゲーテ年鑑第29巻）1987年／「Kabarett研究についての提言」（「ドイツ文学　第83号」）1989年／「陽気なミューズの世紀末――世紀転換期ウィーンのオペレッタとキャバレー」（木村直司編「ウィーン世紀末の文化」［東洋出版］に収録）1990年／「詩人モーツアルト」（「講座モーツアルト」［岩波書店］に収録）1991年／「モーツアルトの横顔」（モーツアルト全集」［小学館］に連載継続中）1990年～．

所属している学会は日本独文学会．

古澤　ゆう子

(1)　ドイツ語・ドイツ文学担当．

(3)　世紀末ウィーン文学の本質を正しく理解するために必要な社会的背景，歴史的背景の研究．ことに個々の文学作品の中に埋め込まれていて，後世の読者には見えなくなっているさまざまな社会的前提や偏見等の掘り起こし作業を進めている．

(4)　W・M・ジョンストン著「ウィーン精神」(全2巻・共訳)．みすず書房．昭和61年・

マリー・アントワネットの伝記と資料――アルネトとS・ツヴァイク．「ドイツ文学における古典と現代」(第三書房) 所収．昭和62年．

世紀転換期文学研究の動向．「ドイツ文学」(日本独文学会編，81号) 所収．昭和63年．

なお，日本独文学会，オーストリア文学研究会，ハプスブルク史研究会，日本ペンクラブに所属している．

田辺　秀樹

(1)　小平ではドイツ語のほか，数年ごとに独文学，前期ゼミを担当．国立では学部共通ゼミナールのほか，数年ごとに3，4年生のためのドイツ語，独文学講義，独文学原典講読を担当．

小平ならびに国立でのドイツ語の授業においては，初等文法の修得と読解力の養成を主眼としつつ，言葉を通じてドイツ語圏の社会，歴史，風土，文化等への理解を深めることを目標としている．

小平ならびに国立での独文学講義，前期ゼミでは，自分の研究領域の中から，学生諸君の関心と合致しそうなテーマを取り上げるようにしている．ここ数年で取り上げたテーマには，「ドイツの文学キャバレー」，「戦後ドイツのシンガー・ソングライター」，「文学的モーツアルト像」などがある．

2.「ウィーン便り」三修社　昭和61年

井上　修一

(1)　前期――ドイツ語1年再履修クラス
　　ドイツ語1年特設クラス
　　ドイツ語2年（2クラス）
　後期――共通ゼミナール
　大学院―ゼミナール
　　文芸社会学講義

前期のドイツ語1年の授業ではドイツ語文法の基礎を反復練習を通じて確実に習得させる．教える文法のレベルは2年になって読本で読解力を養成するにも，ラボやAVを使って運用能力を高めるにも，必ず必要になる必要最低限度の内容に限っている．ドイツ語2年では平易な文学作品を読みながらドイツ語の読解力を養うことを主眼にしている．その際，実用面での会話力，作文能力の向上にも配慮を欠かさない．

後期および大学院のゼミ，講義においては，ドイツ文学の歴史の中で特異な地位を占めるウィーン世紀末文学の特質ならびにその歴史的・社会的背景を，主としてシュニッツラーとホフマンスタールの作品を例にしながら，具体的に考えさせている．

(2)　学内　2年生のクラス担任
　　社会学研究科入試委員
　学外　（財）ドイツ語学文学振興会理事
　　ドイツ語技能検定試験実行委員
　　オーストリア文学研究会幹事

表現力・読解力を養成すべく努力している．国立の共通ゼミでは，ドイツ語の実際的な運用能力養成のため，ビデオ教材等を利用してトレーニングを行うとともに，現代ドイツのさまざまな問題についての理解を深めるように演習を進めている．大学院では，オーストリア世紀転換期の文学を，当時の思想的・社会的状況との関連において評価する作業を行っている．演習も思想的なものと文学作品とを併せて扱っている．

(2)　日本独文学会（理事），日本独文学会教育部会（幹事），雑誌「基礎ドイツ語」編集長．

(3)　パロディー論．現代ドイツ語の諸相．

(4)　所属学会等については(2)を参照．

最近の著書，論文は以下のとおり．

1)　Gedanken zu 'japanischem' Deutsch——aus didaktischer Sicht——"Japan——Sprache, Kultur, Gesellschaft" 所載（昭和60年）

2)　ドイツ語圏——そのひろがりと文化——「一橋論叢」第87巻第4号所載（昭和63年）

3)　Spiel mit dem Gleichklang——Zur Linearität sprachlicher Zeichen : "Energeia und Ergon, Band III" 所載（昭和63年）

4)　Die japanischen Vorstellungen von Österreich, "Mehr als Maschinen für Musik, Beiträge zu Geschichte und Gegenwart der österreichisch-japanischen Beziehungen" 所載（平成2年）

翻訳

1. ポルツィヒ：「ことばの不思議—近代言語学序説—」（共訳）白水社　昭和48年

2. コセリウ：「コセリウ言語学選集第4巻」（共訳）三修社　昭和58年

単行本

1.「会話で学ぶやさしいドイツ語」白水社　昭和55年

ヒトラーへ』をテキストとしている.

(2) 学内では国際交流セミナー専門委員会委員.

(3) ハイネを中心とするフォアメルツ期のドイツ文学が全般的な研究テーマであるが，現在は，十九世紀初頭のベルリンにおけるR. ファルンハーゲン，H. ヘルツなどの「ユダヤ人サロン」がもつ文化史的・社会史的意義を明らかにする作業に着手したところである．これと並行してハイネ散文作品の翻訳紹介を継続中で，現在『シェイクスピア劇の女性たち』の全訳を進めている（『ハイネ散文作品集』第五巻に収録，1994年に松籟社より刊行の予定).

(4) ハイネに関する研究論文を学内紀要および年鑑『ハイネ研究』（東洋館出版社）などに発表，またその他フォアメルツ期のドイツ文学を代表する作家たち，ベルネ，フライリヒラート，ドロンケ，アウエルバハなどについても論文，書評および解題を学内外に発表した．翻訳では『マルクス・エンゲルス全集』（大月書店）収録の書簡集の一部のほか，ドイツ史およびドイツ初期社会主義史などに関する共訳がある．最近では1992年春に，ハイネの自伝的断片『メモワール』の翻訳および解題が『ハイネ散文作品集』第三巻（松籟社）に収録，刊行された．またベルネ関係の書評が近く学内紀要に掲載される予定である.

所属学会は日本ドイツ文学会と社会思想史学会，その他ゲーテ協会などの研究団体にも所属している.

諏訪　功

(1) 小平でのドイツ語，国立での共通ゼミ，大学院（ゼミナール）

小平では1年生にドイツ語文法の基礎，2年生にはさらにドイツ語による

(3)　関心領域は二つあり．19・20世紀のイギリス小説とヨーロッパ文学における古典的伝統（the classical tradition）．前者については，現代イギリスの小説を特に修辞学的観点から考えている．後者に関しては，ウェルギリウスの『牧歌』を主テクストとするすぐれて間テクスト的なジャンルとしての牧歌の伝統を，ルネサンスの模倣理論を援用しつつ考察する予定である．

(4)　1991年4月本学に着任以降，発表論文なし．翻訳として，R. クリバンスキー，E. パノフスキー，F. ザクスル『土星とメランコリー』（共訳，晶文社，1991年）．さらに，D. P. Walker, *The Ancient Theology* の翻訳を進行中（1993年刊行予定）．

ドイツ語

宮野　悦義

(1)　小平での独語，国立での共通科目・共通ゼミナール（独語，独文学），および大学院（ドイツ法思想特殊問題）を担当．

小平では独語初級および中級を担当，中級クラスでは現代ドイツ史に関連する教材を通じてジャーナリスティクな独語への習熟を意図している．国立における独語第二についても同様である．共通ゼミナールにおいてはフォアメルツ期のドイツ文学に関連する文献を講読，ただし毎年受講者がいるわけではなく，たびたび中断している．大学院では「ツァイト」紙を教材として，統一後のドイツが抱える諸問題を考察してきた．ただし本年度については受講者の語学力の関係で，S. ハフナーの『ビスマルクから

(3) S·T·コールリッジを中心とするイギリスロマン主義詩人たちの詩や散文が提起する人間と自然，想像力と理性，欲望と抑圧などの問題を，社会的・歴史的背景を視野に入れながら，テクストに密着しつつ考察し，併せて，ロマン主義的精神を，ヴィクトリア朝，モダニズムの時代から現代に至る後続世代が，どのように継承・批判し，発展させたかについて検討すること．進捗具合については，(4) の業績を参照のこと．

(4) 論文：'"Two Conflicting Principles" Reconciled : The "Free Life" and the "Confining Form" in *The Rime of the Ancient mariner*'（『リーディング』第 9 号，1989 年），「片意地な島々から人間の過剰の海へ――『ヒュー・セルウィン・モーバリ』についての覚え書き――」（『リーディング』第 11 号，1991 年），「タンタロスの焦慮：コールリッジ前期会話体詩における自然の理想化をめぐる問題」（『言語文化』第 28 号，1991 年），「コールリッジの家をめぐって――ネザー・ストウィを中心に――」（『一橋論叢』第 109 巻第 3 号，1993 年）．

翻訳：W・J・T・ミッチェル『イコノロジー：イメージ，テクスト，イデオロギー』（共訳，勁草書房，1992 年）．

所属学会：日本英文学会．

榎本　武文

(1) 1992 年度の担当科目は，小平分校での「英語 A・B」と「英米文学」．「英語」では，修辞と内容において手応えのあるテクストを講読した．「英米文学」では，18～19 世紀のイギリス小説概観として，代表的な作品を四篇解説した．

(2) なし．

また，『フィネガンズ・ウェイク』を研究会にて講読中.

(4)「『ユリシーズ』における死と再生のカーニヴァル」(『言語文化』第25巻　1988.12.5)

「『ブリーヴン』と『ストゥーム』に向けての物語 (2)」(『一橋論叢』第105巻第3号　1991.3.1)

「『ブリーヴン』と『ストゥーム』に向けての物語」(*Joycean Japan*. 第2号　1991.6.16)

「カーニヴァル的なるものモリー」(『一橋論叢』第107巻第3号　1992.3.1)

所属学会としては，日本英文学会，日本ジェイムズ・ジョイス協会.

藤巻　明

(1)　小平での前期英語（クラス英語Aと選択制英語A，B）．クラス英語は，毎回の聞き取りテストと，現代英米文学短篇集の精読．選択英語Aは，ラジオニュースの聞き取り・内容理解テストと英作文などにより，英語の総合的能力の向上を目指すマス・メディア英語と，時に暗唱しながら季節の進み行きに合わせた名詩鑑賞の二つ．冬学期だけ担当した英語Bは，*A Book of English Essays* という選集によるイギリス散文精髄の読解.

国立の社会学部科目英文学原典講読は，R・A・Foakes ed., *Romantic Criticism 1800-1850* をテクストに用い，ロマン主義的思考とわれわれの思考の間の継続性に力点を置いた，イギリス・ロマン主義詩人たちによる代表的詩論の原典精読.

(2)　学内で一般教育科目等担当教官会議・教育改革委員，LL委員.

家庭教師――『ねじのひとひねり』論」(*Strata* 4号に掲載)，書評は，Jonathan Freedman: *Professions of Taste*（『英文学研究』第69巻第2号に掲載).

所属学会は，日本英文学会，日本アメリカ文学会，アメリカ学会.

金井　嘉彦

(1)　小平での英語，および国立での共通ゼミを担当.

小平での英語の授業では，イギリスの小説・戯曲・論文など幅広い教材を用いての講読と，LL教室での様々なテープやビデオテープを用いての聴解訓練を主に行なっている．最近は，語彙力のアップを目指し，毎週単語の試験も行なっている.

国立でのゼミナールでは，イギリス小説の講読と，それに関連した論文を読んだ上でのディスカッションを行なっている．また，普段から問題意識をもって物事を見るということを習慣化させるために，毎月1人～2人の学生に，特に自分の卒論と関連したことに限らず，研究発表を行なってもらい，その後全員でディスカッションを行なうという会を設けている.

(2)　学内では，LL委員，一橋論叢編集委員を務める．(留学のため平成4年7月まで).

(3)　主に文体論を基礎にして，ジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』を研究している．これまでは，ロシアの批評家ミハイール・バフティーンが提唱したカーニヴァルという観点から『ユリシーズ』を見ることを研究テーマとし，それを4本の論文にまとめて終了させた.

現在は，20世紀初頭の社会的言説と『ユリシーズ』との関係についての研究と調査を進めるために留学中.

行詩)，欽定訳聖書，ミルトンの『失楽園』をプリントを用いて紹介した．できるだけ原文を読んで英文学に直に触れてもらいたい．

(2)　前期学務委員．

(3)　スウィフトの時代（17 世紀から 18 世紀）の文学とその背景．特に文学と政治・思想・科学との関連．

(4)　「スウィフトの医学的風刺」(『一橋論叢』第 105 巻，第 3 号，1991 年)．“Snift and the State-Physician”(『試論』第 31 集，1992 年)．「スウィフトの蔵書」(『言語文化』掲載予定)．所属学会は日本英文学会，日本ジョンソン協会．

町田　みどり

(1)　前期課程の英語．後期課程の共通ゼミナール．

前期課程では，アメリカ小説．文化論などを講読．英語を訳しただけで事足れりとするのではなく，英語で書かれたものの内容・行間を読み取り，理解すること，また，それについての自分の考え・問題意識をもつことを授業の目的として考えている．

後期課程でのゼミナールでは，19 世紀のアメリカ小説および論評を輪読している．

(2)　なし．

(3)　ヘンリー・ジェイムズを中心に，19 世紀後半の社会・文化現象と文学との相互関係を探ること．現在は 19 世紀における中産階級の増大が文学にどのような影響を与えたかを考察中である．

(4)　発表論文は“The Transformation of the Heroine in Henry James's *The Wings of the Dove*”(*Strata* 3 号に掲載)，「鏡像としての女

しく減少したことが残念である．ゼミナールでは現代英語の標準的記述文法書をテキストにして英文法の枠組みをとらえ，各自の関心に従って特定の文法現象を解明して行くことを目標としている．

(2)　新しい言語理論の成果を取り入れながら現代英語の文法を記述，説明していくことが研究課題の一つであり，その方向で「動名詞構造研究の動向」(*Lexicon*)，「英語の叙述語句の位置づけをめぐって」(『一橋論叢』)，「二重目的語構文の構造」(『一橋論叢』) などを書いてきたが，拠り所としていた言語理論である生成文法理論があまりに抽象的になった現在，その最先端を追うことへの関心が薄れ，より妥当な理論を模索しつつ記述文法の在り方を考えている．しかし，具体的な成果をあげるに至らず，ふがいなく思っている．単なる文法規則では説明できず，辞書に個別に記述する現象への関心もあって，ここ数年は『BBI 連語辞典』の日本版作成に相当の精力を使ってきた．幸い今年度中には出版の運びとなった．これを機会にコロケーションとは何かについての理論的考察，またその点からの英和辞典の記述の見直しなどをしてみたいと考えている．

所属学会は，日本英文学会，日本英語学会（評議員），日本言語学会．

橋沼　克美

(1)　小平での英語，国立でのゼミナールと英文学史．

小平英語では時事問題を扱ったものとアメリカのベストセラー書を紹介したものをテキストに使い，講読中心の授業をしている．

国立のゼミナールでは昨年に引き続き，ジョナサン・スウィフトの作品を読んでいる．英文学史は今年度から開講された科目で，私にとっても初めての科目．夏学期はシェイクスピアの『ハムレット』とソネット（十六

会の理事，日本スコットランド協会の理事をつとめている．

(3)　17 世紀英国の政治思想の研究を続行中．ベイコンの評伝を現在は執筆している．その外に思想史の方法についての批判的検討を行っている．

(4)　『カメレオン精神の誕生』(1991 年・平凡社)，「『ユートピア』物語のすすめ」(『一橋論叢』4 月号 1992 年)，また翻訳としてQ・スキナー『マキアヴェッリ』(1991 年・未来社) などがここ数年の間の仕事である．

所属している学会は日本政治学会，日本イギリス哲学会，ルネッサンス研究所である．

小倉　敏博

(1)　前期の英語，後期の各学部共通科目としての英語第四（英語学），ゼミナールを担当する．前期では講読のテキストに一般向けの言語論を含めるようにしている．これはプラクティカルな英語の運用能力の養成に直接結び付くものではないが，言語について客観的に考えることが少ないと思われる学生に，その機会を与えることを目的とし，有益であると考える．その他の講読テキストとしては，現代英語の慣用法のおもしろみを教えてくれるものを今年度は選択した．講読以外では，聴解力を養うためにBBC の放送等，生の英語を録音したものを聞き取るという上級の内容の授業を行っている．学生の関心は高く，やりがいがあるが，基礎的な聞き取り能力の乏しさがはっきりするのも事実であり，学生自身による地道な訓練なしには希望の達成は難しいであろうと痛感している．後期の英語第四（英語学）では教職課程選択の学生を主対象として，英語の音声，文法，歴史などについての英語学の基礎的知識を与えるものをテキストとして講読，講義を行っている．教職課程の制度の変更により，受講する学生が著

BBC 等の番組を視聴させるのも，一つには子音中心主義の British English は特に母音で言葉を聴いている日本人に聞きづらく，にも拘らず普通日本では耳にする機会が少ないからであり，また一つにはどんな優秀な頭脳と耳も，これを一定時間刺激することなしには外国語の聴解は不可能だからであるが，さらに大きな理由は，イギリスにはコマーシャルのコピーの切端を情操中枢に詰め込んだ人間が比較的少なく，公営と民営を問わず，その電波には普通の「人間」が登場する確率が高いからである．

(2)　目下英語エリア主任，LL 委員，小平施設整備委員等で多忙．

(3)　この 7 年間は殆ど D. H. ロレンスの伝記執筆に費した．

ようやく先頃『薄明のロレンス　評伝 D. H. ロレンス I』(小沢書店) が出版され，あと 1 年で全 3 巻が完結する予定．

他にはロレンス・ダレルに関する論文が幾つかある程度．

塚田　富治

(1)　前期課程での英語とゼミナール，後期課程でのゼミナール，大学院での文芸社会学の講義を行っている．英語では英国近代思想，および現代の英国の社会と文化について，英国で出版・発行されたテキストを講読している．前期課程のゼミナールでは日本文化とヨーロッパ文化の比較・検討という観点から伊藤整やフロムなどの作品を講読している．後期課程のゼミナールではマキアヴェッリやロックなど近代ヨーロッパ思想の形成に寄与した古典作品を講読している．大学院では思想史の方法の批判的検討をめざして，ホイジンガや Q・スキナーの作品を講読している．講義もまた一つの作品であると考えて，作品の完成度を高めるよう努力している．

(2)　学内では複数の委員会に参加している．学外では日本イギリス哲学

(4)　英米民俗学に関する論文としては“Non-Balladic Elements in the Middle English *Judas*”(*In Honor of Shigeru Takebayashi*, ed. by Nakao et al., Kenkyusha, 1986) など約20編，英語辞書学では『英語辞書の比較と分析（第1〜4集)』(研究社，1980-89) に再録された論文（計7編）の分担箇所，“Review of The *Concise Oxford Dictionary*, Eighth Edition”(*International Journal of Lexicography*, Vol. 5, No. 2, 1992) など，執筆・編集に参加した辞書には『新英和大辞典（第5版)』(研究社，1980)，『新英和中辞典（第5版)』(研究社，1985) などがある．所属学会は日本英文学会・日本口承文芸学会.

井上　義夫

(1)　小平分校での英語（夏学期5，冬学期6)，国立では学部ゼミナール，大学院講義を担当.

小平でのクラス指定クラス3座は，LLでBBC放送のテレビ・ラジオ番組を視聴し，主として聴解力を養うと同時に，併行してテキスト一冊を用いながら隔週に中学・高校並みの小テストを行ない，貧弱な語彙を増やすよう努めている.

他の授業では小説と論説の類を読んでいるが，概ね最近の学生諸君は「受験英語」を軽視するためか，そもそも文科系の勉強を怠って入学したためか，或いはおよそ想像力や「精神」というものを持合わせないか，全うな文章が読めない.

今後は何を話しているかも自覚しない英語のお喋り人間が巷に溢れる見込みであるから，本学からは一人でも多くの物事の道理を弁え，外国人と英語で普通の人間として話のできる者を世の中に送り出さねばならない.

によって作家の創造力のメカニズムを解明するという従来からのテーマに沿い，主に史劇について考察を進めたい．

(4) 『一橋論叢』，『言語文化』，『一橋ジャーナル』に上記のテーマに従って悲劇を中心に論文を発表して来たが，最近では，『ジュリアス・シーザー』――プルターク再解釈として――（『シェイクスピア全作品論』研究社，1992年9月，所収）がある程度．所属学会は，日本英文学会，日本シェイクスピア協会，国際シェイクスピア学会（ISA），米国シェイクスピア学会（SAA）．

桜井　雅人

(1)　前期課程では英語・特殊講義，後期課程ではゼミナール・英語学（I・II）・英語科教育法，大学院では各国経済思潮特殊問題（英米）を担当している．英語（外国語科目）の内容は講読（文化や社会についての論説が多い）・LL演習・英作文などであり，特殊講義では主として英米民俗学に関する諸問題を題材にしている．後期課程のゼミナールでは英語学または英米民俗学の文献（英文）をテキストとして講読演習（場合によっては他の英語演習を含む）を行っている．英語学（I・II）では英語史・英文法論・英語音声学などを，英語科教育法では英語教育学の理論的および実際的な事項を講義している．各国経済思潮特殊問題（英米）では英米の民俗学（ないしは民衆思想・民衆生活史）と関連する諸問題を扱っている．

(2)　特記すべきほどのものはない．

(3)　英米の言語伝承（とくにバラッド・民謡などの口承文芸）を中心とした民俗学の（ないしは民俗学的な）研究を続けている．それと並行して英語辞書の分析研究および実際の執筆を行っている．

旨は *MCJ News* 13 号に掲載).

所属している研究団体は，日本英文学会，日本中世英語英文学会，日本ミルトン・センター，新日本英米文学研究会，世界文学会，比較文明論学会，英国書誌学会，日本シェイクスピア協会.

山田　直道

(1)　前期：英語（1 年クラス制英語，英語 A)，後期：英文学講義（社会学部)，共通ゼミナール，大学院：英米経済思潮特殊問題（経済学部).

前期の英語は，1 年クラス制で英文学の古典の一つである W. シェイクスピア作の『リチャード三世』を精読しつつ読了部分について BBC 製作のビデオを鑑賞し，まとまりある有名場面についてエッセイを課している. 別の 1 年クラス制英語と選択制の英語 A では，LL 教室を使用し発音矯正と聴解力養成を行っている. 英語表現法教育の一貫として従来から選択制で一クラスは必ず開講して来たが，今年は 1 年生で英語の実際的運用について好き嫌いもあり勉強経験にも個人差があるクラス制にわざとぶつけて，意欲，進歩の度合い等の面で選択制との比較を試みている.

後期の社会学部における英文学講義は，英国ルネッサンス文学，とりわけ詩と劇について，時代背景の概説と具体的な作品味読を間テクスト的に行っている. 共通ゼミナールは，シェイクスピアの 1600 年前後の作品に焦点をあて，精読と討論を通じて作家の創造力の多様な深まりを味わおうと試みている. 大学院では英国の編年史家であるホールとホリンシェッドをとり上げている.

(2)　小平分校主事.

(3)　シェイクスピアの作品と典拠の綜合的かつ全体的な比較を行うこと

を行っている．英語以前の，日本語の読解力・作文力の程度の低さに驚いている．いわゆる「英会話」への無原則的な憧れが，学生の思考力・文章力を著しく衰えさせていることは明らかであり，大学での語学教育からは「会話」を直ちに排除しなければならないと日々痛感させられている．

国立での学部ゼミナールでは，ロシアに於ける『失楽園』受容史（Valentin Boss, *Milton and the Rise of Russian Satanism*, Univ. of Toronto Press, 1991）をテキストとして輪読，露・独・仏語の引用が非常に多く，小平での第2外国語の復習にも役立っており，文化の国際的影響と受容の問題，ペレストロイカの下での英国の初期ブルジョワ思想再評価など，時事的興味も喚起しているようである．

大学院では，16〜7世紀の英国社会史・政治史・文化文学史の特殊問題をリポートさせ，近代化の思想史的意味を討論している．

(2) 学内では小平分校主事（'90・8・1〜'92・7・31）の他，後期共通科目委員会委員など若干の学内委員会委員．学外では日本ミルトン・センター理事，新日本英米文学研究会常任委員．

(3) ミルトンを中心とした，英国17世紀の問題を文学・言語の側から再検討すること．『闘士サムソン』（*Samson Agonistes*）の注釈を現在作成中．古注の整理を終了，来年中の出版を予定している．他に，ライフ・ワークの一つとして，英語語法辞典の資料を集めている．

(4) 「ミルトンとゲルマン的愛の系譜」（平井正穂編『ミルトンとその時代』1974年，研究社，所収）などの英国ルネサンス文学論の他，西洋文学史，英語史，文学理論，18〜9世紀英国小説などについて幾つか論文形式のものを書いてきた．（研究社の『英語年鑑』バック・ナンバー参照）

過去2年間は分校主事職多忙にて発表論文なし．書評（『言語文化』28号に掲載）の他は，1991年秋の日本ミルトン・センターでのシンポジウム「ミルトンとフェミニズム」にパネリストとして参加した程度（発表要

彼らの作品及び関連文献を収集中である.

(4)　大学院在学中からアメリカ南部出身の代表的作家 William Faulkner を研究対象にしてきたが，彼の作品に見られる南部特有のユーモアにとくに興味を持ち，それと，民族的独自性を有するユダヤ人を描くユダヤ系作家の作品の中のユーモアとを，その原点に遡って分析する方向に進んだ．この過程で発表した論文には，「ショーロム・アレイヘムの黒いユーモア」，(『アメリカ文学 1971』1971)，「シャーロム・アレイヘム——現代アメリカユダヤ系作家の先駆者」(『一橋論叢』1974) などがある．南部方言関係では，「アメリカ南部英語の vernacularism」(『言語分化』別冊 1985) などがある．そのほか，『現代作家論　ウイリアム・フォークナー』(早川書房 1973) で，『死の床に横たわりて』論を翻訳，年譜，書誌の作成を担当した．翻訳では，サムエル・モリソン『アメリカの歴史』3 (集英社 1971)，フィリップ・ロス『ルーシィの哀しみ』(集英社 1972)，ジョン・ドス・パソス『U.S.A. (一)』(岩波書店 1977)，同『U.S.A. (二)』(岩波書店 1978) 等，以上何れも共訳．所属学会は日本英文学会，日本アメリカ文学会，アメリカ学会.

滝沢　正彦

(1)　小平分校での英語 (夏学期 2，冬学期 5)，国立本校では学部ゼミナール (通年 2) ・大学院講義 (冬学期 1) ・同ゼミナール (通年 1) を担当.

小平では LL 教室利用の 1 座の他は現代英国小説を講読，「生きた現代英語教育を」という「社会的要請」に応えている．他に，小論文の和訳と英訳 (「死んだ英語」と呼ばれるのであろうか) を隔週宿題に出して添削

語　学

英語

平野　信行

(1)　平成4年度は，小平では英語A，英語B，国立ではアメリカ文化，共通ゼミナール，各国経済思潮（大学院）を担当．このほか，年度によっては，小平では英米文学，ゼミナール，国立では英語第一，社会学部の英文学原典講読，同じく英文学講義のうちのいくつかを担当する．

英語の授業では，英米文学の基本的な文献を原典で読むことを何度か試みたが，学生にとっては相当重荷のようで，現在では注釈付きのテクストを使用することが多い．しかし，多少難しくても，原文で読むほうがよいと思うものは，オリジナルで読むように心懸けている．ゼミナールでは，現代アメリカ小説ないし文化論を対象にしているが，できる限り学生の希望を優先している．今年度は現代アメリカユダヤ系作家の一人Isaac Bashevis Singerの短篇集 *Short Friday and Other Stories*（Penguin Books）を輪読している．学生はユダヤ人社会の慣習に戸惑っているようで，教師の説明が多くなる傾向がある．

(2)　附属図書館小平分館長（昭和63年7月から平成4年6月まで）　学外はなし．

(3)　1983年から84年にかけてのアメリカでの在外研究を契機に，アメリカ南部作家の作品に現われる方言を主な研究対象としているが，1980年代後半から90年代に入って，新しい作家が次々に誕生しているので，

項目・書式

名前

(1)　担当科目・授業名・内容など

(2)　学内外での講義以外の仕事など

(3)　現在の研究課題・進み具合など

(4)　既発表論文・所属学会など

各科目ごと生年月日順に掲載されている

研究・教育活動報告

——語学・数学・体育・理科エリア——

（1992年12月）